

II 新池窯におけるベンガラの調達について

はじめに

ベンガラは縄文時代以来、土器や埴輪などの器物、あるいは古墳の石室壁面を赤く（より正確には赤橙色・赤褐色というべきだろうが、便宜上赤とよぶ）塗りあげ、さらには装飾古墳の壁画を描くというように、さまざまな用途に使われてきた。¹⁰² 酸化第二鉄を主成分とするベンガラは、水銀朱とともに、考古遺物を扱うものにとって、だれしもが多かれ少なかれ接してきた資料といえよう。ところがこの先史時代のベンガラについては、成分分析的な研究や事例報告がほとんどで、原材料に関しては赤鉄鉱を粉末にしたとか、赤土を焼いてつくったという一般論的なことが記されている程度である。またベンガラの産地については「日本全国産地ならざるはなし」という先学の指摘¹⁰³もあって、個別遺跡に即したベンガラの調達方法についての考古学的なアプローチはあまりなされていない。

日本産のベンガラが商品として大量に流通するのは、宝永4年（1707）に備中・高梁川上流にある吹屋銅山での発見とその直後に製造法が確立してからのことで、それまでは朱印船の貿易品にもあげられた貴重な輸入品であったとされている¹⁰⁴。ただし、こうしたベンガラは組織的に大量に生産されたきわめて良質のもので、考古資料に塗布されたものと同列にみることはできない。吹屋では銅鉱石といっしょに产出される硫化鉄鉱を焼き込み、この焼石をふるいながら溶液をつくり、さらに煮沸濃縮している。こうしてできたのがローハという結晶で、これをふたたび焼いたあと、水洗い、水篩、あく抜きをして、ようやく微粉末のベンガラが得られるという手順になる。古墳時代以前には銅鉱石の採掘はおこなわれていないので、こうした手法は取り得ず、ましてや縄文・弥生時代に輸入されていたとは考えられない。縄文や弥生時代の遺跡から色鮮やかなベンガラを塗布した土器や文様を描いた土器が出土するが、一時にしかも大量にベンガラを使用する遺物ということでは、窯跡における埴輪群の右にでるものはないだろう（本節I項P.348）。今回の新池遺跡の調査では、厖大な量の埴輪のなかに数多くのベンガラ塗布資料を認め、同時に、1号窯から多くの赤変した岩石を検出した。ここではそうした特異性に着目して、埴輪窯におけるベンガラの調達という問題に迫ってみようと思ふ。

1号窯出土の岩石

表38は第3章第2節I項の表6で報告した1号窯出土の岩石類を集計したものである。岩種は頁岩・砂岩・チャート・礫岩に分けられる。大きさは手の平にのる程度のものから人頭大までであるが、なかにははぜるように割れているものもあり、火中する前は小さいもので拳大はあつたとみられる。また352(PLATE63c)のように、打撃痕とリングの認められる頁岩もあり、一

部については人為的に打ち削られていたようである。これらの岩石はいずれも新池遺跡の背後にせまっている古生代から中生代に形成された北摂山地(丹波帯)に産するもので、チャートが亜円錐化していることから、いわゆる河床疊と判断された¹⁰⁰。北摂山地の山間からは、安威川や芥川などの中小の河川が流れ出ていて、河原ではいまでもこれらの岩石が採取できる。とくに安威川は、新池遺跡から西へ1kmたらずで一直線に行来ができるところにあり、採取地としてはもっとも条件がよい。安威川の基本調査によると、河床疊の約8割がチャートで占められており、のこりの2割の中に他の岩石が混じるといわれ、このことは芥川などほかの河川でもほぼ同様の傾向にある。しかしに、1号窯では総個体数の76%、総重量の58.7%が頁岩であり、チャートは個体数で8%、重量で4.2%にすぎない。重量比の数値に数量比ほど大差がないのは頁岩の比重(2.1前後)とチャートの比重(2.7前後)の差によるもので、ボリューム的には数量比の差が実態にちかいものである。もし河原でアトランダムに岩石を採取したとすれば、当然の結果として、チャートが多くなるはずだが、窯場での数値がまったく逆転しているのは、採取に際して石を選別して持ち込んでいるからであろう。その目的はいったい何であったのか。

そこでまずこれら火熱をうけた岩石の出土状況を詳しくみると、1号～3号窯および前庭部、灰原、排水溝などの周辺、すなわちA群窯の窯場では、1号窯からのみ出土してい

岩種	色別の個数	重量(g)	平均重量(g)	比率(%)
頁岩	赤 28	13,798	492	43.8
	黒 49	4,688	96	14.9
	小計 77	18,486		58.7
チャート	8	1,324	166	4.2
砂岩	赤 14	10,429	745	33.1
礫岩	赤 2	1,257	629	3.9
合計	101	31,496		

表38 1号窯出土岩石集計表

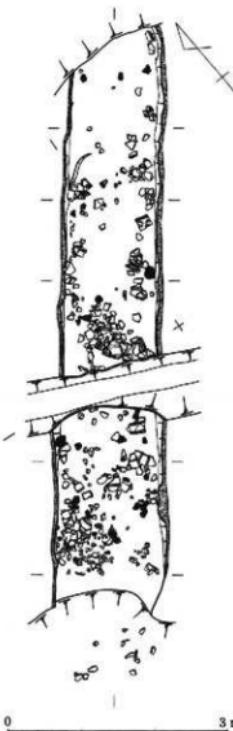


図314 1号窯 岩石の分布状態

るという点があげられる(図314)。いいかえれば、1号窯では埴輪を焼く一方で、岩石の加熱作業がおこなわれていたとみられるのである。埴輪は通常800°Cから900°Cの焼成温度を維持しながら焼かれるので、当然のことながら窯もそれに耐用するようにつくられていたと考えられる。ところが頁岩は900°Cから1000°Cでは再熔融しないにもかかわらず、資料のなかには、335・393など(PLATE63c)のように、高熱のために発泡したものも数多くみとめられることから、埴輪窯としてはしばしば過熱の状態になったことが予測される。この予測は、I項で指摘したように、1a号窯の下半部の天井が操業中にいちはやく崩落したことに対応するのかも知れない。おそらく当時としても、こうした状況が考えられたからこそ、A群窯では岩石を火熟するための窯をただの1基に限定して使用していた可能性を指摘しておきたい。

ところで、この4種のうち酸化焰焼成して表面が一样に赤くなっている資料は頁岩・砂岩・砾岩で、チャートは色調の変化もごくわずかで白濁気味のものが多い(図版28・29)。前3者のうち砂岩は14点のすべてが、砾岩についても2点が赤変していた。また頁岩は77点中、28点が赤変し、49点は地色である暗灰色を呈していた。岩石が赤くなるのは、石に含まれる鉄分が加熱・酸化された結果であることは自明だが、問題は暗灰色の頁岩である。たしかに数量については、暗灰色のものが赤色のものをうわまわっているが、両者の総重量を比べると4,688gと13,798gとなり、その比率は約1:3と大きく逆転する。また1個あたりの重量は96gと492gとなり、暗灰色のものがかなり小さいことがわかる。そこで一覧表(第3章第2節I項の表6)にしたがって、出土地点別にそれぞれの岩石の赤変した資料を数えてみた(表39)。1a号窯・1b号窯を問わず床面に接して出土したものは、もともと赤変しないチャートを除けば、頁岩の大半にあたる88%、砂岩・砾岩のすべての資料が赤くなっている。逆にいえば、この3種の岩石は窯内で酸化焰焼成をすれば確実に赤くなるのである。それに対して堆積土や

1b号窯の灰原部分で出土した岩石をみるとチャートと砂岩が床面の状況と同じであるのに、頁岩では赤変していないものが86%以上を占めることになる。たださきにも触れたように過熱されて発泡したもの(PLATE63c)の中にも、地色(暗灰色)の資料がいくつもあることから、床面の赤い頁岩との異同は、やはり酸化焰でしっかり焼かれたか否かの違いになってくるのであろう。また床面に人頭大のものがいくつもみられるのは、1a号窯の焚口側の天井が操業途中で崩落したからで、最終まで稼働していた1b号窯では大きめの岩石はすべて持ちだされたと考えられ、その残余の部分が灰原内にのこったものとみられる。

つぎに頁岩を主体とする岩石が火中された目的について考えてみたい。これらが1号窯のみから出土していることから、焼台などの窯道具でないのはあきらかで、やはり焼石そのものを

	床面		灰原		合計
	赤変	無変色	赤変	無変色	
頁岩	21	3	7	46	77
チャート	0	3	0	5	8
砂岩	13	0	1	0	14
砾岩	2	0	0	0	2

表39 岩石の赤変化的状況

原材料として利用するために焼いたものとおもわれる。要はこれらが火熱されておこる物理的・化学的变化が利用形態とどのようにかかわってくるかである。窯での变化としては、上述したように、3種の岩石が赤変するということのほか、熱による破碎(熱破碎とよぶ)があげられる。仮に岩石の赤色化が目的であれば、これまでにもこの「赤石」を使用した考古学的資料が知られていないなければならないだろう。ましてや1号窯の岩石にみられる赤色化はきわめて皮相的なもので、またその表面は熱のために風化しており、この赤石自体になんらの利用価値は認めがたいのである。そこで考えられるのは、熱破碎である。図版28の右上や右下の頁岩をみると、ひび割れや破碎面がみとめられるが、この現象はとくに大振りのものに目立っている。そして小さな物では、わずかであるが、接合資料がみられる(PLATE63c-365-369)こと、さらに10g以下の微細片がほとんど検出されることなどから、この熱破碎は採取した岩石を粗割りするための作業としてとらえられる。もちろん粗割り作業を効率よくおこなうために、熱した岩石を水中で急冷したことは容易に想像されるところである。

ベンガラの素材としての頁岩

縄文時代以降、古代のベンガラは「赤鉄鉱の粉末や赤土を加熱して顔料とした」と説明されてきた。そうに違いないが、すべてがそうだろうか。考古学では「なかった」ことを「ない」というのはじつに難しい。新池遺跡では大量のベンガラが使用されていたにもかかわらず、新池の埴輪生産遺構(埴輪窯・工房・工人集落)からは、一片の赤鉄鉱も得られなかつた。このことは何も新池遺跡に限ったことではなく、畿内をはじめとする各地の埴輪生産遺跡では通有のことである。とすればベンガラそのものが埴輪生産遺跡に大量に搬入されたものか、もしくは窯場単位で調達していたのであろう。新池遺跡の埴輪にみられる赤色顔料は、色鮮やかな純良なものとはいはず、とても竪穴式石室や石棺に塗布されたような良質のものではないようだ。一つには新池の埴輪が一時にしかも大量に生産されるということがあるのかもしれないが、埴輪のベンガラは埴輪を赤くするという使命以外には、他の化学的な効果が期待されていないので、品質の良し悪しは二の次になるのであろう。とにかく埴輪の窯場では、短期間に大量に、しかも簡便に入手できることが望ましい。そのためには

	平均 頁岩	平均 砂岩	チャート	平均 埴輪岩
SiO ₂	58.10	78.33	89.9	57.95
TiO ₂	0.65	0.25	0.2	0.57
Al ₂ O ₃	15.40	4.77	3.7	13.39
Fe ₂ O ₃	4.02	1.07		3.47
FeO	2.45	0.30	2.3	2.08
MnO	tr.		0.1	
MgO	2.44	1.16	0.5	2.65
CaO	3.11	5.50	0.3	5.89
Na ₂ O	1.30	0.45	0.7	1.13
K ₂ O	3.24	1.31	0.7	2.86
H ₂ O	5.00	1.63		3.23
P ₂ O ₅	0.17	0.08	0.9	0.13
CO ₂	2.63	5.03		5.38
SO ₃	0.64	0.07		0.54
BaO		0.05		
C	0.80			0.66

表40 岩石の化学組成 (単位%)

はやはり現地での調達が、無理なく無駄なくということになる。

表40は今回とりあげた岩石のなかで検出例の多かった頁岩・チャート・砂岩とその他の若干の岩石についての化学組成を示している。⁶⁰ 注目するのは Fe_2O_3 の数値である。このなかで、チャートと砂岩がわずかな数値であるのに対して、頁岩の Fe_2O_3 の高い数値が際立っているのが読み取れる。それは平均堆積岩よりもかなり高く、ベンガラの素材としての必要条件のひとつを満たしているといえるもので、新池遺跡の頁岩についても、第4章第1節I-2項の分析結果でそうした特性は裏付けられている。さらに頁岩は粘土を母体とする堆積岩であることから、粒径が微細で、これまたベンガラの成分を分離・抽出するのにふさわしいものとなる。

こうした頁岩の特性と前項で記した頁岩を主体とする特定岩石の採取、さらには特定窯での熟破砕までの一連の作業の流れからすると、1号窯から検出された4種の岩石のなかでも、この頁岩こそが、埴輪の赤色顔料の原材料として搬入されたと考えられる。冒頭に述べた吹屋では、じつにさまざまな工程を経てベンガラを製造しているわけで、新池遺跡でも熟破砕による岩石(頁岩)の粗割り後に、粉碎・加熱・水洗い・水築などの工程があったものとおもわれる。それらはいまだちに明らかにならないが、数多くの埴輪にみられるベンガラの塗り刷毛の痕跡(口絵19)や内外面に付着した滴(口絵27)をみると、泥質分がかなり除去されていることがわかる。

まとめにかえて

1号窯で多くの焼石を検出したとき、一体これは何だろうと思った。ただ石の赤さが埴輪についたベンガラとそっくりなことだけが、印象としてあった。報告書を作成するにあたって、1万点におよぶ埴輪を観察したとき、数多くのベンガラ塗布資料をあつかうことになった。朱色の鮮やかなもの、赤黒く変色したものなど、それぞれに濃淡や明暗の差がみられ、いずれもが焼成前に塗られたものであった(前項のA群窯について)。そして頭の中がベンガラで真っ赤になったとき、この焼石のことがひらめいたのである。

焼石を観察する過程で、小さな実験を試みた。⁶¹ まず暗灰色を呈する頁岩のひとつをガスバーナーで熱してみた。所要時間は約5時間。入れ物に使った金網は焼け切れんばかりになったが、頁岩はなかなか赤くならないので、加熱を停止。約1時間後に、「成果はなし」と、ほほあきらめかけていたところ、冷却した試料の表面がベンガラを塗ったように淡く赤変していたのには驚いた。そこでさらに実験をすすめるために、別の試料を金槌で碎き、それを乳鉢でさらに細かく擦りつぶして細粉にした。そしてこの粉末を水に溶かして、生の模造埴輪の顔面の線刻部分や襟・腰紐部などに塗り付け、覆い焼きの窯⁶²で焼成したところ、この顔料は見事に赤く発色したのである(口絵30・31)。ただし試料がわずかなために、粉末を水築・水洗いしたり、再加熱しなかったので、かなりの泥質分が残ってしまい、塗料が厚ぼったくなったりがあるが、

ひとまずは成功といったところであろう。

「ベンガラは突き詰めれば赤い土のことである」¹⁰という単純な原点にたち返るとき、新池遺跡1号窯で得られた頁岩の一群と小稿の検討結果はすこぶる合点がいくものとなろう。現在、全国で70カ所以上の埴輪生産遺跡がみつかっているが、多かれ少なかれ丹塗りの埴輪が焼かれている。すべての埴輪窯跡で新池遺跡とおなじような手法がとられていたとは思わないが、もし窯内で焼石をみつけたら是非とも一考をねがう次第である。

注

1. 市毛 熊1975『朱の考古学』

また古文化財に使われた顔料の概要を知るには山崎一雄1987『古文化財の科学』が簡便。

2. 莘田錦次郎1902『関東平野の石器時代の朱』『人類学会雑誌』17—191

3. 泉 秀樹1992『弁柄』『文物の街道』II

4. 那須孝悌・松江実千代両氏の教示による。以後の岩石学・地質学的な知見は両氏に拠っている。

5. 新池遺跡で1号窯以外に頁岩を検出したのは、工人集落にある1号溝の1点(PLATE98a-99)と

確認調査時に採集した1点(PLATE133a-23)だけである。

6. 注1におなじ

7. 地学団体研究会編1976『岩石』『新地学教育講座4』からの抜書き。

8. 実験に際しては、鎌ヶ江一朗・中村剛彰が協力した。

9. 平成4年度に実施した『夏休み文化財教室』での「土器づくり」の一環としておこなった。なお覆い焼き実験の具体例については、「4.弥生式土器の製作実験」(『昭和53・54・55年度高槻市文化財年報』1981を参照されたい。)

10. 筆者のベンガラについての質問に対する沢田正昭氏の直言。

III 塚輪生産遺構の変遷

はじめに

新池遺跡における塚輪生産遺構としては、A群塚輪窯3基(1号～3号)、B群塚輪窯5基(4号～8号)、C群塚輪窯10基(9号～18号)、塚輪工房3基(1号～3号)の直接的なものほか、豊穴住居群と土坑群などからなる工人集落や井戸(1号井戸)などがある。もちろん塚輪生産の中心となるのは塚輪窯で、出土した塚輪の検討から、もっとも南に位置するA群窯と中央にあるB群窯がIV期に属し、北側にあるC群窯がV期と確認されている。ここではとりあえず、塚輪窯の分布を基軸に、遺構群の分類をおこない、新池遺跡における塚輪生産の実態について、迫ってみたいとおもう。記述にあたってはA群窯の操業期間をA期、B群窯の操業期間をB期、C群窯の操業期間をC期としてすすめ、その後に工房群や工人集落とのかかわりを探ることにする。

塚輪窯群の変遷

A期

A群窯については、全面調査の結果、半環状の排水溝によって画された幅約17mの範囲の中に1号から3号の3基の半地下式窯が並列して営まれていたことが判明している。また、これら3基が同時に稼働していたことは本節Ⅰ項において検証したところである。遺物は大量のIV期の塚輪片と布留式Vの若干の土師器片や岩石が出土している。

B期

B群窯は、基本的に確認調査を実施しただけで、とくに遺物の様相については不分明な部分も数多くこされている。5基の塚輪窯(4号～8号)は、8号窯にみられた深さ2mにも達する煙出しの在り方や5号窯の床面が現地表から1.2mと深いこと、さらには窯場全体でスサ入りの焼土塊すなわち塗り込めの天井材がみられないことなどから、いずれの窯も地下式であったと考えられる。細長い平面形も、規模の差こそあれ、よく似ている。窯の配列をみると4号から7号までは整然と並列して営まれているのに対し、8号だけがほぼ東西軸に設けられていた。この違いはそれぞれの窯が斜面地に対して直交するように築かれた結果であって、かならずしも8号窯が他の4基と別のグループに属すということにはならない。この5基がまとまりのある一群であるのは、出土する円筒塚輪(図82・83、PLATE70c・71)がいずれもB種ヨコハケをほどこしたIV期のもので、また灰原を共用するということでも、追認される。4号窯南縁から8号窯北東端までの距離は約29mで、窯の集約度はかなり高いといえるだろう(図80)。

B群窯がA群窯と基本的に異なるのは、群全体を取り囲む排水溝が掘削されていないことと

埴輪窯の構造が地下式であるという2点に尽きる。またB群窯出土の埴輪は少量のために、数多く出土したA群窯の埴輪とは統計的なデータなどについて直接的な比較はできないが、円筒埴輪がB種ヨコハケをほどこすという点では、同じ範疇に含まれるものである。ただヘラ記号におなじものがみられず、わずかに検出した形象に人物埴輪片22が含まれていることがA群窯との違いで、また円筒埴輪の口縁部のC類もA群窯の遺構からは検出されなかった。

C期

C群窯についても、確認調査をおこなっただけで保存措置を講じたために、全容は十分に解明されていない。埴輪窯の構造は、9号窯で検出した深さ2.3mにもなる煙出し部や18号窯焼成室の床面の深さ(検出面から1.4m)、加えて窯場からスサ入りの焼土塊が検出されなかつことなどから、いずれも地下式と考えられる。そのなかで13号と14号のように、あきらかに重複しているものがあり、とても10基が同時に稼働していたとは考えられない過密な状況である。このことは、窯同士が接近しすぎている11号と12号、14号と15号のあいだでもうかがえる。とくに11号と12号は、焚口間の距離が0.8mしかなく、しかも0.7mの段差は窯場での同時作業を困難にするものであろう。C群窯の操業が相当な期間にわたっていたことは、第Ⅲ章で述べたV期の埴輪の型式差(例えば18号窯の小型円筒4と7号窯の小型円筒17)からも知れるものであり、ここでは一応9号・11号・13号・15号・17号・18号の先行グループ(C1期)と10号・12号・14号・16号の後出グループ(C2期)といったような組み合わせで、前後2時期の計画的な築窯があつたことを予見しておきたい。出土した埴輪類については、窯ごとに比較検討できるほどの資料は得られていない。C群窯で特筆すべきは18号窯の灰原から出土した土師器の平底の甕(図98)で、形態からは南関東地方の鬼高式土器を連想させるが、搬入品かどうかは断定できない(第4章第1節I-3項)。

B群窯との比較では、地下式で排水溝をめぐらさない点は共通するが、出土する円筒埴輪がIV期とV期という違いがあり、確実に先後関係が認められる。形象埴輪では石見型盾形埴輪の顕在化と半截竹管による描線法がC群窯に特有のものである。またヘラ記号についてもB群とC群とでは同じものはみられない。

表41は各埴輪窯群の遺構・遺物を簡単に比較したもので、一見して新池遺跡での窯群の変遷

時 期	窯跡群	基 数	窯 の 構 造		排水溝	円 筒	形 象
			半地下	地下式			
A 期	A群窯	1~3号	○		○	IV期	家・器財・動物
B 期	B群窯	4~8号		○	×	IV期	+人物?
C 期	C群窯	9~18号		○	×	V期	+石見型盾
				○	×	V期	同 上

表41 各埴輪窯群の比較

が読み取れよう。具体的には、IV期からV期へ移行する過程で、半地下式から地下式、排水溝の付設から欠如へと、A期・B期・C期の順に整合性をもって、埴輪窯群が設営されていったことがわかる。こうした群移動がいかに合理的であるかは、当初のA群が、埴輪の搬出にとって、もっとも条件のよい平野部に面した段丘の南西斜面に位置し、つぎのB群は谷を少し入ったところの東側の斜面にまたり、最新のC群はもっとも谷奥へと、次第に条件を悪くしながらも順序よく窯場を設定していたことがうかがえるからである。ただ窯場そのものの立地としては、南側に緩く傾斜している段丘の西南端にあるA群窯は段丘面の雨水の流れを多くうけるところに位置していて、決して最良の場所というものではなかったようである。そのことが結果として、排水溝を必要としたのであろう。それに対して、B群・C群は段丘の長軸に直交するかたちで設けられたことと地下式の窖窯の採用とが相俟って、排水溝の掘削が不必要になったものとみられる。

埴輪工房群について

新池遺跡に窯場が設営される契機は、後述するように三島における大古墳の造営が要因となっている。そしてA期からC期へと断続的におこなわれる埴輪生産は、必然的に粘土採掘地点や燃料となる薪の伐採地の変移がおこることにより、やがて窯や工房そのものが移動することになるのであろう。

新池遺跡の調査では、A群・B群・C群と3群の埴輪窯を検出したものの、工房群は段丘西辺部で検出した3基からなる1群のみであった。これら3基の工房はいずれも方形の堅穴で、ほぼ等間隔に整然と南北に並んで配置されていた(図99)。第3章でも詳しく記したように、各工房から出土した遺物は、IV期の埴輪類、初期須恵器、布留式Vの土師器などで、時期的にも齊一性が高く、加えて1号工房の須恵器の甕22と2号工房出土の須恵器片が接合するなど、3基の工房が同時に在ったことは疑いない。工房群と埴輪窯との対応については、IV期の埴輪類の存在によって、A群もしくはB群に該当することになるが、8号窯の煙出し部が2号工房の西辺を切り込んでいること(図109)、6号窯の煙出し部が1号工房の掘形と1.5mしか離れていないこと、3号工房の排水溝がB群窯の灰原部に向かって流れ下っていることから、B群との同時存在はまったく排除される。その一方で、A群の3号窯検出の円筒埴輪の「皿」字形のヘラ記号(図53-14・15)と同じヘラ記号(図122、PLATE82・134-2)が3号工房から出土していて、工房群とA群埴輪窯が組み合うことが確認されている。これはA群窯からB群窯へと変移したとする、さきの見解や8号窯と2号工房との先後関係とも矛盾しない。

そこであらためてこれらの工房について検討してみる。表42は各工房の規模や土坑の数を示したものである。いずれも床面積が100m²をこえる相当大規模なもので、それぞれの柱組みは

工房	主軸	土坑 I 類			土坑 II 類	梁行 柱間 (m)	桁行 柱間 (m)	規模		
		粘土	なし	合計(ベンガリ)				東西	南北	面積
1号	南北	11	9	20(9)	2+1?	2.8	3.2~3.6	10.2	11.6	118
2号	南北	4	6	10(1)	17	2.8	3.5~3.6	9.9	11	109
3号	東西	10	21	31(4)	3	3.4	3.6~3.8	12.8	10.7	137

表42 工房一覧表

2間×2間相当の側柱に、1号・2号工房は南北方向、3号工房は東西方向に2本ずつの棟持ち柱を配した構造になっている。興味深いのはすべての側柱が桁方向に直交するかたちで2つの柱穴が並列していることである(図100-109・119)。調査当初は大きな屋根を細い柱材で支えるために2本の柱を結わえ、上端では桁を又受けするような仕組みを想定していた^(a)が、その後に屋根の中心を占める上屋部分とその周縁を取り巻く下屋部分に分けて考えた方が良いのではないかとの指摘^(b)があった。検討の結果、1号工房では中央の棟通り部のE列と東側主柱のE列および西側主柱のW列の梁行の柱間が等分であることが判明し、この柱組を基本に上屋の復原を考えるのがより合理的であるとされた。同様に、2号工房では棟通り部のW列と東側主柱のE列および西側主柱のE列、3号工房では棟通り部のS列と北側主柱のS列および南側主柱のS列の柱間がやはり等分になっていた。壁については、幅が0.6mにも達する周溝がめぐつていること、周溝の要所に粘土溜の土坑II類(1号・3号工房)がもうけられていること、そして周溝内に滞留していた粘土が排水溝に流れ出していたこと(3号工房)などからみると、はじめから存在していなかったとみられる。ただ調査時点では遺構がかなり削平されていたことから、もとは周壁の立ち上がりも高かったと考えられる。また緩斜面地に堅穴を掘削しているので、外周には土堤がめぐっていたことも当然予測される。なお工房の復原については、後日に刊行される整備報告書での検証を期している。

床面に散在する土坑については、粘土や粘質土を内蔵し、埴輪製作作業に直接かかわる土坑と考えられるI類(作業用土坑)と粘土貯蔵施設であるII類(貯蔵用土坑)に分別した。このうちI類は、1号で20基、2号で10基、3号で31基と工房ごとに基数の差がかなりみられ、しかも各工房の面積比をうわまわる割合になっていて、単純に工房の規模には比例していない。もっとも多くの土坑I類を検出した3号工房では、1号・2号のそれに比べて一回り小さなものが多く、また土坑同士の切り合いがみられるなど、やや様相が異なっている。そこでいま少し詳しく各工房での土坑の在り方をみると、1号工房では20基の土坑のなかで11基に粘土が残存し、なおかつそのなかの2基には粘土の容器に転用した円筒埴輪が据えられた状態で遺存していた。とくにSK4やSK18(口絵6)では、粘土が満杯のまま放置されていて、にわかに埴輪製作活動が中断したことがうかがえ、これに似た状況は、3号工房の土坑II類(SK29~SK31)や土坑I類(SK19・口絵7)にも認められる。それに対して2号工房では据えられたままの円筒埴輪は

みられず、むしろ主柱8や主柱9の遺物が柱穴に落ち込んでいる出土状態(図111、PLATE20)からすると、速く工房を解体・撤去した様子がうかがえる。

図315は工房ごとに土坑I類の規模(直径と深さ)についてまとめたものである。1号と2号工房では直径の平均値がともに約54cmであり変わらない。しかし1号工房ではかなり深いものが散見できるのに対し、2号工房では直径が大きい割に深さが20cmをこえるものはみられない。また3号工房は直径の平均が48cmで、全体としてやや小振りのものが目立ち、深さも25cmをこすようなものはみられなかった。各工房の床面積(周溝部分を含んでいる)を土坑I類の基数で単純に割って、その占有面積を計算すると、1号では5.9m²、2号では10.9m²、3号では4.4m²となって、2号の土坑が突出することになる。このうち1号ではSK12とSK8・SK13が近接し、3号でもSK4がSK3やSK5と近接、さらにSK12とSK13、SK27とSK28のように確実に切り合っているものがみられ、前者は作業効率を考えると同時に存在していたとはおもわれず、後者はこれらの土坑に先後関係があった事実を示している。そこでこれらを2小期の所産(実際には順次穿つていったものとみられる)としてとらえるならば、1号では10基を同時存在として11.8m²、3号では15基として8.8m²となり、2号の占有面積とかなり整合性をもつようになる。この占有面積と土坑の大きさや数量を考慮すると、3号ではより小さな製作単位の土坑の集合、1号ではより大きな製作単位(例えば深さ30cm以上のもの)を内包する土坑の集合、といったものが予見される。すなわち1号では大型品を含む埴輪製作、3号では大型品を含まない同等規模の埴輪、いわば中型の埴輪製作が専らおこなわれていたのであろう。そして土坑の数が少なく、その占有面積も広くとられた2号では、手間ひまのかかる形象埴輪を中心に製作していたことが臆測される。

工房出土の埴輪についてみると、各工房とも数量的には少ないが、中型I類の円筒埴輪が一様に出土している(表43)。復原実測図で示した円筒は土坑I類で検出したもののはか、周溝内から出土したものも多い。口縁部の形状はA3類が7点とともに多く、あとA1・A2・A4類が若干みられる。胴部外面の調整はBb-1種(5点)、Bb-2種(4点)、Bo種(5点)で、Ba種は1点にとどまっている。これら中型I類に関しては工房間で大きな差異は認められない。大型は明

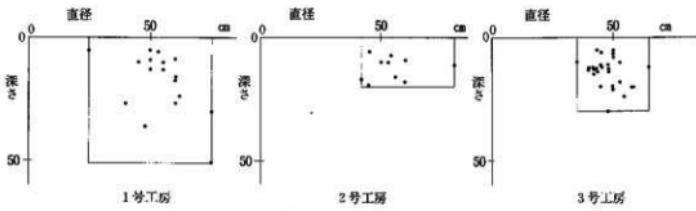


図315 1号～3号工房の土坑I類の規模

器種	属性	1号工房		2号工房		3号工房	
		形状・調整	計測値cm	形状・調整	計測値cm	形状・調整	計測値cm
大型	タガ			(II類) 1M(1)太い			
	口縁部	A1(1) A3(1)	8.8	A2(1) A3(1) A4(1)		A1(1) A2(2) A3(5)	8~11
中型	胴部	Bb-1(1) Bb-2(3)		Bb-1(2) Bb-2(1)		Ba(1) Bb-1(2)	12
		Bc(1)		Bc(3)		Bc(1)	
円筒	タガ	1M(6) 2M(3) 1台(2) 2台(1)	11.2~12.6	1M(3) 2M(2) 3M(2) 1台(3) 4台(1)	12.8、13	1M(3) 3M(1) 4M(1) 1台(2)	
T類	スカシ孔	○		○		○	
	ヘラ記号			2種類(2)		M ₍₁₎ A ₍₁₎	
	基底部	右巻き(2)	10、10.6	左巻き(2) 2帯づくり(1)	8.4~11.4	右巻き(1) 左巻き(2)	9.6
小型	胴部	Bb-2(1)					
内筒	タガ	3M				1台(1)	12.8
	スカシ孔	○					
	基底部		12.8				10.8
調査	口縁部			A1(1) A2(1)			
形象				蓋(2) 肩?(1) その他(3)		蓋(3)	

表43 工房群出土埴輪のおもな属性 () 内は点数 各工房の右端の数値のうち、口縁部と基底部の横は高さ、タガの横は心々距離を示している。

確なものはみられなかつたが、2号工房の2については復原径こそ大型品に満たないものの、3cmを測る太いタガや厚さ1.8cmの分厚い器壁などは大型II類の形状を示している。小型はわずかに1号と3号から1点ずつ出土しているだけで、出土傾向などについて個別に論じることはできない。各工房に形象埴輪が極端に少ないので、埴輪を搬入する目的が土坑I類の容器の調達であったために、それに適合する中型の円筒がしばしば選ばれたからであろう。またこれらの容器が工房内で高さを案配に調整するために打ち削っていたことは、すでに報告(P.140)したところであるが、各工房から少しずつ出土している朝顔形の口縁部の破片もおそらく円筒部を容器の大きさに割り取ったあと、廃棄されたものとみられる。さらにいえば2号工房で復原した蓋(図116-42~53)の傘部についても、他の形象がほとんどみられないことから推せば、朝顔形などと同様に、基台部の円筒部分の利用を図ったものかも知れない。それにしても、工房群出土の形象埴輪28点のなかで、25点までが2号工房から出土している事実は、2号工房で形象埴輪を製作していたとするさきの推定に対し、一つの根拠をあたえるものであろう。

土器については、土師器の壺・高壺・壺と須恵器の壺が出土していて、その多くは土師器の高壺と壺である。また2号工房で出土した壺の平底66(図117)は撰河ではみないので、東国からの搬入品かとおもわれる。破片のために、型式の認定はできないが、彼地出身の埴輪工人がもたらしたものであろうか。なお工房の周辺地域を含めても、土師器の壺や須恵器の壺の類がまったく出土しなかつたのは、寝食を伴わない工房ならではの有様として首肯される。

工人集落について

段丘東南部で検出した工人集落は堅穴住居14基(5号住居は7世紀の堅穴で、本稿の考察対象から除外している。)、溝4条、土坑10基などからなっている。堅穴住居については、第3章において、4本の主柱と周溝をもつAタイプ、主柱も周溝ももたないBタイプ、2本の主柱と周溝をもつCタイプに分けた。棟数はAタイプが8棟、Bタイプが5棟、Cタイプが1棟である。規模はAタイプの平均が一辺約5.8mとやや大きく、Bタイプの平均は一辺約4.5mとなり、おおむね小規模である。Cタイプの1棟については長方形で、小さな部類に属している。図316は各住居の規模を復原し、タイプ別に表示したものである。

まずはAタイプの堅穴住居の構成についてみてみる。それぞれの住居は地面の起伏に沿うようにして建てられていて、全体として統一的な方向性は認められず、居住域のここかしこに点在しているといった状況である。そのなかで4号住居は8号・9号住居と重複していて同時に存在しないことがあきらかである。同様のことは双方の周溝間が2.5mしかない10号・11号住居についてもいいうことで、しかもこの2棟は集落内における相対的位置が変わらず、継続性をもった建物として建て替えられたものと考えられる。近似して検出された2棟にこのような解釈が認められるなら、同じタイプの2号住居と7号住居も継続性のある遺構としてとらえ



図316 タイプ別堅穴住居の分布

られることになり、4号と8号、1号と9号も組上に乗ってこよう。このうち2号住居は集落成立当初から存在していた2号溝と3号溝に取り囲まれて同時に掘削されていることから7号に先行するものと考えられ、逆に9号住居は2号溝と一連の1号溝を切り込んでいるので後出するグループになる。また4号住居は9号と重複していることからやはり先行するグループに属し、8号は4号の建て替えと解することになる。さらに11号住居はBタイプの12号に建て替えられているのが確認されている(第3章、工人集落)ので、10号に先行すると考えるのが妥当であろう。その結果、Aタイプの各住居は1号・2号・4号・11号の4棟からなる先行グループと7号・8号・9号・10号の4棟からなる後続グループが前後の2小期にわたって営まれていたことになる。これは集落から出土しているON46型式とTK208型式の須恵器のなかで、ON46型式がいすれも先行グループの2号・4号から出土していることとも矛盾しない(表44)。

Bタイプについても、やはり3号と6号、13号と14号が近接する住居同士としてまとまっている。このなかで6号住居は、先行する1号住居の掘り込みとの間隔が1.3mで、とても同時に在ったとはおもわれず、後続のグループに属すとみられる。また14号はカマドに壺が据えられたまま放置されていることから、最後まで存立していたと考えられる。12号住居については組み合うものが認められないが、調査の所見では、12号や10号の東半部一帯は近・現代に擾乱されていて、東側の谷部までの狭隘地に12号住居に先行する住居があった可能性もある。ともあれ12号が11号より後出することは調査で確かめられているので、Bタイプについても3号・13号の先行グループと6号・12号・14号の後続グループにわけられるようである。なおBタイプの上屋の形状については、検討すべき遺構痕跡が少なくて判然としないが、小規模な点などを考慮すれば立壁などの施設をもつのかもしれない。

Cタイプの15号住居は、集落の北辺部に単独で建てられていて、全掘したにもかかわらず、カマドや焼土をもたないなど、AタイプやBタイプの住居とは在り方が異なっている。単なる住居とみるよりは、物置などの役割を担っていたものと推量される。

次にA・Bタイプの住居の大半に認められるカマドないし焼土面についてみてみる。カマドは住居の北辺部ないし東辺部で検出するものが多く、焼土面は壁際にあるもののほか、やや離れて存在するものもある。カマドは床面をわずかに掘りくぼめた周囲に土を置き、燃焼部中央に拳大よりやや大きめの台石(PLATE105b)を据えたもので、粘土を塗りこめた堅牢な構造物はみられなかった。煙道および煙出しは明確でないが、一部に壁面を削り込んで成形したもの(8号住居)がある。良好な状態で検出した2号・7号・8号住居のカマドを観察すると、焼土層と灰層が幾重にもみられ、当初のものが壊れるなど使用不能な状態となった段階で、その上面にあたらしい床面を順次成形していくことがわかる(口絵8、図154・157など)。以上がカマドの概要であるが、6世紀以降のカマドと比べていかにも簡易的な構造をもつものといえよ

う。ましてや埴輪生産を専らにする新池遺跡では粘土は豊富に存在するわけで、カマド自体の観察だけではうまく答を引き出せない。またカマドをもたない住居で検出した焼土面についても、こうしたカマドの残欠が多く含まれていると考えられる。なお、これらの住居には主柱のやりかえや竪穴の拡張がみられないにもかかわらず、単一の住居の耐用期間中にカマドの改造がなされていて注目される。しかもこうしたカマドの改造が複数の住居址で確認されているのは、はなはだ重要なことであろう。これを単に定型化するまえの粗雑な構造ゆえに耐用年数が

遺構	住居															溝											小包合			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	器	計	
タイプ	A	A	B	A	B	B	A	A	A	A	B	B	B	C																
先行グループ	◎	◎	◎	◎	×				◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
後続グループ																◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
須恵器の型式	◆	◇	◇	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆			
壺蓋	2				1		2	1								11	10	1	1	1	1	1	1	2		34	5	39		
壺身	5				2	3		2								5	8	1	4	11	1	2	1	1		36	3	39		
高壺蓋	1				1											1											3	3		
無蓋高壺																												1	1	1
壺	1				1											1	2		2			1					8	1	9	
縫		1	1	1												1	1	1	1			1					7	7		
蓋					1		1									1											4	4		
瓶																												1	1	
																												0	1	1
土器	大形															溝											小包合			
	中形															土坑											小包合			
	小形															土器											小包合			
土器	鉢															溝											小包合			
	高壺															土坑											小包合			
	大形															土器											小包合			
土器	小形															溝											小包合			
	高壺															土坑											小包合			
土器	有縫小形															溝											小包合			
	楕円小形															土坑											小包合			
土器	小形脚部															溝											小包合			
	大形															土坑											小包合			
土器	中形															溝											小包合			
	小形															土坑											小包合			
土器	直口															溝											小包合			
	外反															土坑											小包合			
土器	把手															溝											小包合			
	底部															土坑											小包合			
土器	その他の															溝											小包合			
埴輪	円筒N期															溝											小包合			
	網彌形															土坑											小包合			
埴輪	形象															溝											小包合			

表44 人集落出土土器集計表 ◇ON46型式 ◆TK208型式 (包含層は固形分)

短かったとみるのは早計で、最近では近畿地方でも当該期のしっかりしたカマドの資料が増加してきている¹⁰。ただそれらの大半は燃焼部の床面が1枚であり、新池遺跡のように複数の床面をもつものは知らない。このまれな事例を「カマドが断続的もしくは季節的に使用された結果」と考え、工人集落の特性のひとつに加えておこうとおもう。

集落の中央部でT字形に連なる1号～3号溝は、住居群のあいだを縫うように掘削されたもので、近隣の住居で使われていたとみられる土器などが廃棄されていた。この一連の溝は水路としての機能より廃棄用土坑としての性格を帯びたものと考えられる。4号溝も7号と8号住居の間にあって、等高線に平行に設けられており、基本的には廃棄用土坑と考えられる。土坑の類は1号溝の北側と2号溝の西側にあるほか、居住域の東南部から東北部にかけて点在していた。いずれも不整形で、まとまった遺物が出土したのは11号土坑ぐらいで、遺構の性格が判然としないものが多い。

工人集落出土の遺物については、表44にまとめている。須恵器はON46型式とTK208型式にかぎられ、土師器は布留式Vに比定されるほか、埴輪はすべてIV期に属している。ただ集落域が全面的に削平されているために、住居や土坑の一括品であっても、その総量や組成は不十分なものと言わざるを得ないが、およよその傾向はうかがい知れる。まず須恵器と土師器の出土点数と比率は、須恵器94点、土師器235点で、およそ1:2.5の割合になる。なお算出にあたっては、包含層出土資料は除いている¹¹。図317は須恵器と土師器について、器種ごとの数量比を図示したものである。須恵器でもっとも多いのは供膳具である壺身と壺蓋で、この2器種で全体の74%を占めている。ついで多いのは貯蔵用の容器である壺(8点)と釜(4点)をあわせたもので、約13%になる。また甌は7点で、7%強を占めている。意外と少なかったのは高坏で、わずか1点にとどまっている。その理由は脚台の付く供膳具に土師器の高坏が日常的に用いられていたためとみられる。高坏蓋は確実なもので3点、そのほかにも可能性の高い破片が6点¹²みられるが、有蓋高坏は皆無であった。初期須恵器の前半段階ではつまみ付きの壺蓋がしばしばみられるので、その遺剤が新池遺跡のON46型式ないしTK208型式段階まで継続したものかとおもわれ、これらの高坏蓋についても壺蓋として用いられていたことが考えられる。

土師器では、高坏の類が144点(脚部の点数も単純に足し込んでいる)と圧倒的で、全出土土

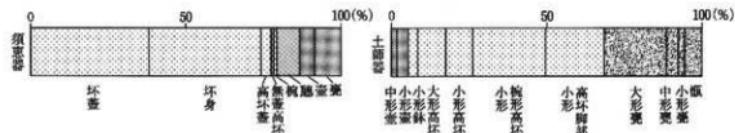


図317 工人集落出土土器の割合(遺構分)

器の61%にのぼっている。また大形と小形の比率は1:4.8で、小形が5倍ちかい数量を占めている。小形の内訳は、壺部のみで比較すると、楕形が有稜のものの約2.6倍に達していることがわかる。つぎに多い器種は甕の61点で、26%になる。内訳は大形が77%と主体的で、中形は18%と少なく、小形は5%とさらに少ない。大形が多いのは唯一の煮沸用具として頻用されていたためであろう。甕は11点で、約5%にあたる。包含層出土の完形品を加えた12点という点数は検出した住居の数には見合うものである。遺構出土の甕と大形甕との数量比は、甕1点に対し甕は約4.3倍の点数が出土していることになる。鉢は小形のみが5点で、極端に少ないとのは脚台の付かない供膳具を須恵器の杯蓋が担っていたからであろう。壺は全体の約5%にあたる12点にすぎない。それも中形と小形だけで、貯蔵用の大形の壺がみられない。貯蔵用の器種が須恵器の壺と甕に託されていたとしても、12点の数量が示す3.6%(工人集落全住出土土器との比率)という割合は、集落全体としては少なすぎる。この点も工人集落の特性のひとつになろう。

埴輪については、包含層の資料も含めて、円筒が25点、朝顔形が2点、形象が2点出土している。もっとも多く埴輪がみられるのは1号溝で、あとは住居の埋土から若干出土しているのと4号土坑で2点検出している。円筒は中型が19点、小型が6点である。いずれも外面にヨコハケの2次調整がみられ、種別が判明するのはBb-1種(3点)とBb-2種(1点)で、タガは1類M形が主体である。2点の朝顔形はいずれも小型で、形象は草摺と基部の破片である。

さて上記した遺構・遺物から工人集落の大勢をうかがうと、まず3タイプ14基ある竪穴住居はON46型式を主体としながらTK208型式の一部を含む先行するグループとTK208型式を主体とする後続グループの存在が基本となり、その他の遺構は、同様の分析から、前後の2群に付設されていたものとみられる(表44上段)。ただし、この両者の時間幅については、出土した須恵器の型式差がわずかで、しかもすべての土器が布留式Vに包括されることもあり、それほど長期間におよばないことはあきらかである。

ところで新池遺跡では、集落を全掘したにもかかわらず、当該期の高床倉庫がまったく認められず、出土遺物にも貯蔵用の土器がきわめて少なかった。このことは、この集落が基本的に農業生産活動をしていなかった証左といえるものであり、あくまでも埴輪製作に直接かかわる工人集団のムラとして存立していたことを予測させる。遺跡内に当該期の明確な墓地がみられないのも、しごく当然のようにおもわれる。

つぎにこの工人集落と埴輪生産遺構との関連についてみると、集落の埴輪がIV期であることから、A期もしくはB期に限定される。そして円筒胴部の2次調整をみると、判明した数が少ないとはいえ、Bb-1種を主としながらBb-2種を含むもので、IV期の前半の様相を示し、新池遺跡ではどちらかといえばA期に相当する。これは工房群出土の土師器と集落の土師器がいず

れも布留式Vに属すこととも齟齬しない。また個別の遺物で、とくに注目したいのは、集落内の1号溝から1点の頁岩が出土していることである。この頁岩は本節Ⅱ項でみたように、ベンガラ調達のために新池遺跡に搬入されたもので、いまのところA期での多用が確認されている。

A期の埴輪生産

上記の1~3項においてあきらかにしたA群窯と工房群そして工人集落の同時併存を根拠に、A期の埴輪生産関連遺構の動向について考察する。表45は2小期にわけた工人集落の先行グループをA期に対応させ、後続グループを後述するB期に対応させたものである。いまひとつの場合としては、工人集落の全期間をA期に包括させることも考えられるが、そうするとA期埴輪生産の開始期は、須恵器でいうところのON46型式期、その終焉はTK208型式期のなかにおさまることになってしまう。この場合、3基の窯が操業開始以来大きな休止期間をとらずにはほとんど間断なく稼働していたとする調査結果と合致しない。なぜならば、ひとつには2型式(旧来のTK208型式幅)における須恵器の時間幅は相当なものであり、しかもその移行のなかで集落が改変されていることにもなり、そこには一定期間の休窓期があつてしかるべきと考えるからである。やはり表45に示したような対応をすればこそ、A期からB期への移行が工人集落を介してスムーズにたどれることにもなり、また窯場の移動によって工房群が他の場所に変転したことでもうまく解釈できるようになるのである。

そこであらためてA期の埴輪生産を復原すると、開始期は工人集落の先行する遺構群の時期、すなわちON46型式期のなかにあり、その終焉は同じくON46型式期の末ないしTK208型式への移行期に求められる。埴輪窯はもっとも平野部にちかい段丘の南斜面に寄窯3基(1号~3号)を設け、工房は段丘の西辺部に大規模な堅穴を3基(1号~3号)設営したのである。またこうしたとき、工房の東側には乾燥場としてのひろい空地が十分に確保されることにもなる。そして工人集落は工房群から東南方向へ約80mのところに展開するといった景観が復原される。各窯では中型埴輪を大量に焼成する一方で、一定の役割分担のもとに特定の器種(大型円筒I類・中型円筒II類=1号窯、大型円筒II類・小型円筒・形象=2号窯など)については焼きわけられていた。こうした役割分担についてはⅡ項でみた1号窯の頁岩の焼成作業も加えられ

須 恵 器	土 師 輪	埴 輪	A群窯				B群窯				工房群				工人集落							
			1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	1号	2号	3号	住居	居	溝	1	2	3	4	土 坑	
			A	B	C		A	B	C		A	B	C		A	B	C	1	2	3	4	
A期	ON46	幅	IV	a ₁	b ₁	↓	↓								↓	↓	↓	1-2-4-11	3-13(?)	15?		
B期	TK208	式V	期													7-8-9-10	6-12-14					8-10-11
																						2-4-5-6-9

表45 A期・B期の埴輪生産遺構の組み合わせ

るのであろう。さらには大型I類とII類にみられる手法の違いや1号窯に特定されるB2類の円筒と朝顔形、3号窯のみにみられる巻帯手法のタガの割り付けなど、窯別に製作手法の一部について若干の違いがみられたが、これらは窯場における作業区分が工房における作業区分とも深くかかわっていることを予見させた。すなわち3基の窯に対する3基の工房の存在はけっして偶然ではなく、そこには1基の工房と1基の窯が最小単位となる縦割り型の埴輪生産方式というものがうかがえるのである。本項の「埴輪工房群」でもみたように、土坑I類の在り方や出土した埴輪類の検討から、3号工房では中型円筒埴輪の大量製作、2号工房での形象埴輪の製作、さらには1号工房における大型円筒の製作などを予測したが、そのことに加えて3号窯に特定される「m」字形のヘラ記号が3号工房から出土していることを追証するならば、1号窯と1号工房、2号窯と2号工房、3号窯と3号工房がそれぞれ対になった生産態勢といったものがうかびあがってくる。いうなれば3対の縦割り型が一体となった埴輪の製作・焼成システムがA期の実態としてとらえられることになる。¹⁰ そしてこのような実態があればこそ、たとえ失敗品の破片でも窯ごとに管理されていたことが推察できるわけで、それはI項でみたように、埴輪片を焼台として活用するときまで引き続いたのであろう。それゆえに同じ窯に同一個体の破片がまとまるといったさきの課題も氷解することになる。

ところでA期の工人集落では、Aタイプの住居が4基(1号・2号・4号・11号)、Bタイプの住居が2基(3号・13号)ないし3基の都合6~7棟の住居が特定され、ほかに非居住型とみられるCタイプの堅穴が在った可能性がある。そしてこれを7棟と見積もったとすると、そこから復原される工人数は多くても30余人ということになる。さきに工房1棟あたりの土坑I類の基數を10~15基と復原したが、これだけの工人数では到底3基の工房と3基の窯を稼働させることはできないとみられ、ましてや粘土や薪など原材料の調達や埴輪の運搬などを考えれば、人手の不足は明白である。これを補うのに他所にも工人集落の存在をみるべきかもしれないが、実際には近在の集落(土室遺跡やツゲノ遺跡)から多くの人が駆り出されるような様態であったとみられる。というのも、A期に引き続くB期の工人集落が、同じ場所に遷地していること、さらにその後の律令期の集落が段丘部一帯に展開していることを考えると、ほかに開地があるにもかかわらず、工人集落が限定的に設営されていたとおもわれるからである。

さてA期の埴輪の搬出先については、当初から3基がセットになって操業していたこと、埴輪のバリエーションのなかに特大の大型円筒I類や大型の朝顔形を含み、形象のなかにも大型の輶・盾、さらには家形I類とした特異な文様帶などの在り方からすると、並大抵の古墳ではなかったと考えられる。そしてA期が須恵器のON46型式と確定したことにより、その対象が中期中頃の巨大古墳に絞り込めるようになった。三島地方でその条件を満たす古墳となれば、新池遺跡から西南方向へ約1kmのところにある茨木市の太田茶臼山古墳(現繼体陵)¹¹しかなく、

以下に検証してみる。

図318は太田茶臼山古墳の前方部の外堤南西地区からの出土品をはじめとする埴輪類である(PLATE135)。詳細は補稿³によられたいが、12などは新池遺跡A期の中型I類に属すもっとも一般的なタイプである。そのほかでは中型の朝顔形14・15のベンガラの塗り具合や塗り刷毛の痕跡は新池遺跡のそれと区別がつかず、小型の朝顔形16などの形状・胎土は工人集落4号土坑出土の18などと酷似している。既報告のなかの北西部外周埴輪列の資料²などは、今回の分類にあてはめると、類型的には5条のタガをもつ中型I b₁類になる(図319-1)。口縁部はA2類、胴部外面の調整はBb-1種、タガは1類で、その間隔は12cm前後である。これらの特徴は

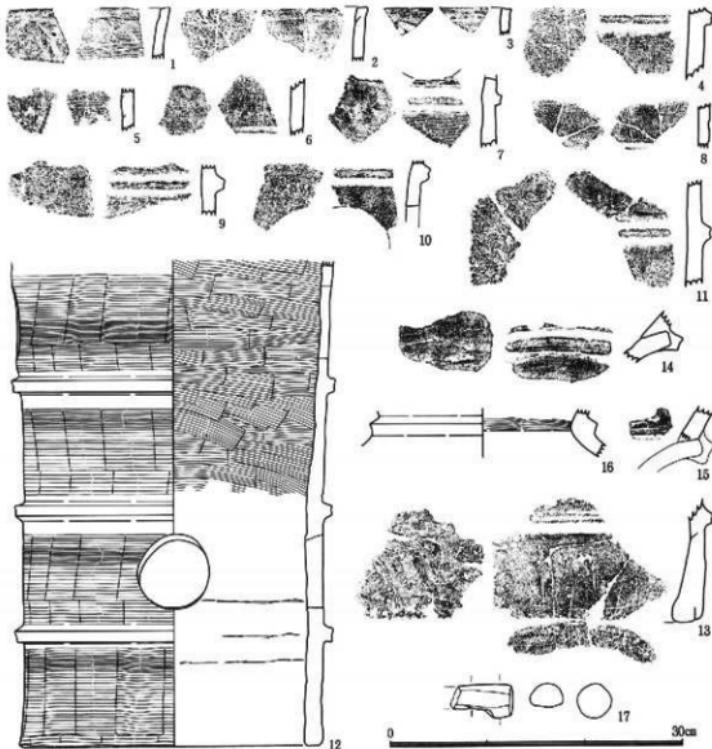


図318 太田茶臼山古墳(1) 円筒埴輪1~13 朝顔形埴輪14~16 形象埴輪 家17

新池遺跡のA期の中型円筒としてはもっともボビュラーなものである。さらにいえば、I b₁類は3号工房で検出していて、3条目のタガの断面形状は、3号窯(40・50など)でよくみうけられるものである。また口縁部のヨコナデの形状は1号窯の5などにもみられる。ついで宮内庁調査資料を覗見すると、中型円筒にI b₁類が確認されるとともに、ヘラ記号に3号工房の3と同種のもの(図319-2)がみとめられ、また口縁部の形状にA2類とA3類が多いこと、胴部の2次調整にBb種とBc種が主体的であることなどが確かめられる。こうした考古学的な資料のつき合わせだけでなく、本章第1節I項で考察されているように、新池遺跡と太田茶臼山古墳から出土した埴輪の胎土分析の結果からも、

両者の同質性が裏付けられている。すなわち新池遺跡におけるA期の埴輪は、その質とバリエーションとともに、多角的な分析結果から、太田茶臼山古墳に立て並べるべく生産されたものと結論づけられるであろう。さらにいえば、新池遺跡の埴輪生産は太田茶臼山古墳の築造を契機として始まったということになる。

つぎにA期埴輪生産の終焉についてみてみる。A群窯では、本節のI項で考察したように、窯内には一つとしてまともな埴輪は残されておらず、床面出土資料のほとんどは焼台として供されたものであった。このことに加えて、第3章で報告した観察結果からは、3基とも廃窯後しばらくしてから崩落したと考えられたことから、これらはいずれも所期の目的を十二分に果したのち、操業を停止したとみられる。実際には窯ごとに一定の役割分担があるので多少のずれがあるとおもわれるが、基本的には太田茶臼山古墳の埴輪が整っていく最終段階で、ほぼ一齊に操業が止んだと考えるのが妥当であろう。しかも操業停止の権限は最終的に焼き上がり数量がチェックできる窯場にあったと考えられるので、1号工房や3号工房の土坑のここかしこに大量の粘土がのこっていたとしても、一応の了解が得られることになる。逆に2号工房にあまり粘土が残っていないのは、形象埴輪を製作していた工房であるという認識と揃めていえば、形象の一群が急速に順当に仕上がったことを示すものとも言える。いずれにしても、このA期の埴輪生産遺構群が三島に突如として出現した巨大古墳に大量の埴輪を供給すべく設営されたことは疑いなく、1本の排水溝で括られたA群窯の3基は、まさに太田茶臼山古墳専用窯とし

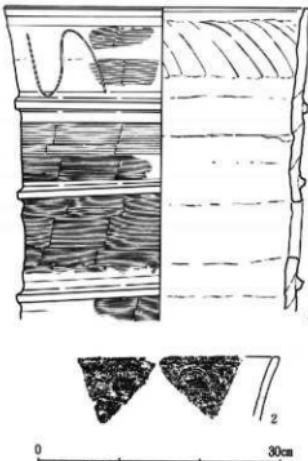


図319 太田茶臼山古墳(2) 円筒埴輪1・2

て機能したものと考えられる。ちなみにA群窯の考古地磁気の測定結果(本章第1節VI項)は、1号窯がA.D450年±10年、2号窯がA.D440年±30年、3号窯がA.D430年±30年とされ、そのなかでも1号窯の測定結果がいちばん磁化方向のまとまりが良いとのことであった。A.D450年±10年はきわめて妥当な結果であろう。

なお1号窯のすり部で検出した入子になった2点の壺(87・88[P.48])については、調査当初より窯鎮めの遺物として注目してきた。この土器の所属時期については、遺物の観察のところでも述べたように、6世紀の中頃のものと推定され、1号窯の廃窯時にあたる布留式Vの範疇でとらえられないものであった。そのことは、これらの壺が正立して出土したことから、地滑り後に置かれたと判断することとも矛盾しない。ひとつの解釈としては、A群窯の閉鎖後にただちに据えたものではなく、のちのC群窯の終焉期、いいかえれば新池埴輪製造所の閉鎖時の窯鎮めに際して置かれたものと考えられる。

B期の埴輪生産

B期の埴輪生産にかかる遺構としては、B群の地下式埴輪窯5基と上記で析出した規模の工人集落(後続グループ)がみられる(表45)ものの、工房群については調査区域内に検出されなかった。窯場の埴輪はいずれもIV期で、集落で検出した土器は布留式Vの土師器とTK208型式の須恵器である。埴輪窯本体の調査はほとんど手がつけられていない状態で、詳細は不明であるが、出土した円筒埴輪はB種ヨコハケを基調とし、なかには図82の1や8のようにBb-1種やBb-2種がわずかながらもみられ、IV期のなかでもそれほど新しく位置付ける必要はない。新池遺跡では、全面調査の結果、古墳時代の遺構・遺物は埴輪生産期に限らず、前期から後期にいたるまでの資料が出土しているが、IV期終末～V期初頭に対比されるTK23型式やこれに直続するTK47型式の須恵器はまったく検出されず、このことがB期の下限を規定するとみられる。またA期の工人集落とB期のそれとは、集落の占地、住居のタイプや棟数など集落規模としては大きな変化はみられず、基本的には住居の建て替えをおこないつつも、その場を踏襲しているといった状況である。したがって、A期とB期のかかわりについては、A群窯の停止後、あまり時間を経ない段階で、A期における埴輪生産の実績をかって操業が再開されたものと思われる。ただ窯場が北側へ移動したことから、工房群はあらたなところに設営されたとみられる。その位置については、段丘上では検出されなかったことから、焚口の開口する西側に移動していたとみられる。B期の埴輪の搬出先としては、土保山古墳・石塚古墳・二子山古墳・番山古墳などが思い浮かぶが、5基分の埴輪の生産量を考えると、三島に限らず、他地域にもおよんでいた可能性もある。今後追究しなければならない課題であろう。

C期の埴輪生産

C期の遺構としては、C群の地下式埴輪窯10基と谷部で検出した工房ないし工人集落にかかわるとみられる1号井戸がある。埴輪窯については、その密集度から2時期にわたる造営と予測されるが、大半が現状のまま保存されているので、詳細については不明といわざるを得ない。ただ部分的に調査した18号窯からは、約100m離れたところにある1号井戸と同じ大型円筒埴輪が出土していて、当該期の埴輪生産関連遺構が谷部に広範に展開していたことがうかがえる。C期の埴輪の搬出先については、その第一に今城塚古墳があげられる。それはこれまでに採集された円筒埴輪の形状や調整が似ているというだけではなく、今城塚古墳出土の円筒埴輪に刻まれている舟のヘラ記号(図320下、PLATE134)と同じ記号がさきの1号井戸の1のほか、8号溝の6とC群窯の17(図91)の3点が出土しており、今城塚古墳の埴輪が新池遺跡で製作されていたことは譲論の余地がない。それは同時に18号窯が今城塚古墳の埴輪を焼成していた窯のひとつであったことを意味し、幅2.6mの規模を有すればこそ、最大級の家形埴輪も焼き上げることができたのであろう。今城塚古墳が真実の繼体陵として学問的に裏付けられた今日の情勢からすると、大王陵と埴輪窯とが直接に結び付く唯一の実証例といえるものである。

今城塚古墳以外で、C期の埴輪が供給された古墳としては、舟のヘラ記号を検出した川西4号墳⁴⁴や狩獵埴輪群を検出した星神車塚古墳などがあげられ、三島にひろくゆき渡っていたことが確かめられている。また最近の研究成果⁴⁵では、奈良県天理市の西山塚古墳や兵庫県神戸市天王山3号墳などでも新池遺跡の埴輪が搬入されていたといわれ、淀川水系を軸とした埴輪の供給圏が確立していたようである。こうした埴輪の流通を差配することの背景には、新池遺跡のC期の埴輪生産態勢というものが、大王陵への供給という事実とともに、王権直属の埴輪製造所を体現していたからにはならない。それに加えて、鬼高式土器の豪が18号窯から出土したことは、新池遺跡埴輪製造所の基盤がさらに広範な地域とのつながりのなかで成立していたことを想起させる。ついでのことながら18号窯の埴輪と須恵器との対比

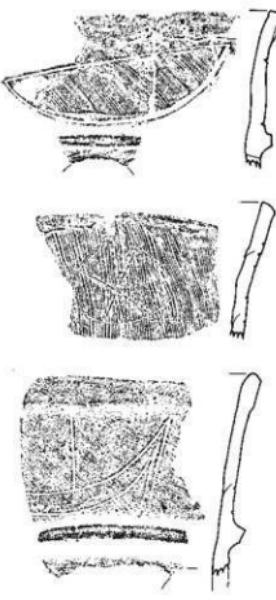


図320 今城塚古墳出土円筒埴輪のヘラ記号

については、1号井Bの排水溝である8号溝の埴輪窓から舟のヘラ記号のある円筒埴輪6とMT15型式の須恵器が共存し、一応の接点がみいだせている。

注

1. 森田克行ほか1990「復元面[埴輪工房]について」『新池遺跡』－新池遺跡発掘調査報告会－高槻市教育委員会
2. 平成3年度「高槻市史跡整備検討会」の討議
3. 森田克行1990「新池遺跡」「古墳時代の研究」第2巻の掲載図に加算したものである。
4. 合田幸美1988「出現期の窓」『網干善教先生華中記念考古学論集』同記念会埋蔵文化財研究会1992「古墳時代の窓を考える」第32回埋蔵文化財研究集会
5. その理由は、包含層中にはかなりの量の土師器の細片、とくに窓の胴部や高窓片が含まれているので、単純に加算すると構成比に誤差が生じると判断したためである。以下の数値もとくに断らない限りは、同様の処理をしている。
6. 9号住居(1点)・1号溝(2点)・2号溝(1点)・4号溝(1点)・4号土坑(1点)出土の坏窓として数えている破片のなかにみられる(第3章第2節Ⅲ)。
7. こうした在り方はきわめて単純明解で、あとは採集期間といったものを考慮すれば、古墳の規模、すなわち埴輪の数量に応じた生産態勢がたやすく組めるといったところに最大の利点があるようにおもわれる。
8. 森田克行1985「地域における編年(撰述)」「季刊考古学」第10号
9. 2・4・6・8~13は茨木市教育委員会の発掘調査による出土品。そのほかは外周部での採集品である(表48-18)。種類としては円筒・朝顔形・形象がある。円筒は中型と小型がある。中型で類似が推定されるのは12のIa類もしくはIb類で、タガの間隔は12cmと標準的である。外面の2次調整はBb-2種で、3段目のハケ目は2段目までとは刷毛原体を上下逆にして調整している。基底部高は10.4cmを測り、接合法は右巻きづくりである。その他はいずれも破片である。口縁部はA1類、A2類、A3類が1点ずつあり、3は外面をタテハケ調整していく、階家からの混入品かも知れない。胴部片はいずれもヨコハケ調整していく、タガはM形の1類が多い。ハケ目は粗いもの(12)から細かなもの(4-8)まで様々である。13は基底部高9.6cmを測り、内面に中状の刺突痕が3カ所ある。小型の7は外面をヨコハケ、内面をナデ調整していく、繊細なタガを付している。朝顔形は中型と小型がある。中型の14・15は内外面とも厚くベンガラが塗られていて、塗り刷毛の痕が顕著にみられる。小型の16は頭部片で、タガの形状は工人集落出土の小型品に酷似している。形象17は家形の梗木とみられ、下辺に焼成前の割り込みがある。

茨木市教育委員会1988「縦体天皇陵の埴輪」

10. 一海和夫1981『允恭陵古墳外堤の調査』大阪府教育委員会所載の資料。図319は再製図したものである。
11. 土生田純之1988『三崎藍野陵整備工事区域の調査』『考古部紀要』第39号所載の資料。報告されているなかでは、4-7が中型円筒のIb類とみられるほか、36は大型II類になる可能性がある。口縁部の形状は、A2類(1~3-5-7~9-13)、A3類(4-6-10-12)、B1類(11)があり、胴部の2次調整ではBb-1種(25-38)やBb-2種(23)がみとめられるとともにBc種が目立っている。タガの間隔は11cm~12cmを測り、16にみられるタガのやや特異な形狀は3号窯の32や40のものとおなじものである。また固化されていなかったが、第9トレンチ出土資料のなかに2号窯の5にほどこされた特徴的なハケ目と同様のハケ目が観察された。ヘラ記号については1の凸型の二重弧線と同様のものが3号工房の3にみられる。形象では57の文様が家形I類と同種ではないかとおもい詳細に観察したが、円形文が手書きであり、やや趣が違っていた。草摺57は連續した革紐を鋸歯文で表現したもので、2号窯にも類品がみられる。そのほかの大多数の資料についても、色調・胎土などいずれも新池遺跡出土埴輪に包括されるものであった。このほかにも朝顔形や形象がみられたが、新池遺跡出土品と直接対比検討できるものはみられなかった。図319の2は、当該紀要から転載したものである。

なお資料の実見に際しては、徳田誠志氏にご高配いただいた。

12. 森田克行1991「新池埴輪製作遺跡」「考古学ジャーナル」No.331

なお、壺形土器を窯床めに用いたと推定されるものに、立山山第2号窯出土の1個体分の壺がある。また新池18号窯灰原出土の鬼高式の壺5についても、同様の解釈ができるかも知れない。

小田富士雄・真野和夫ほか1972「立山山窯跡群」八女市教育委員会

13. 高槻市教育委員会編1991「今城塚古墳」「遺跡ガイド」2

14. 錦ヶ江一朗1988「川西4号墳」「鷲上都街跡他関連遺跡発掘調査概要-12」高槻市教育委員会

15. 大船孝弘1989「埴輪と古墳の製造集団について」「大阪の埴輪窯」財大阪文化財センター

IV 新池遺跡の推移

新池遺跡では発掘調査の結果、旧石器時代から中世にいたる遺構・遺物を数多く検出した。ここでは調査成果にもとづいて、新池遺跡の推移を簡単にまとめてみる(表46)。

旧石器時代～弥生時代

旧石器時代では段丘上に国府期のキャンプ地があったと推定され、9点のナイフ形石器をはじめ、翼状剥片・縦長剥片・叩き石などが散発的に出土している。いずれも後世の開拓によって原位置を失ったものであり、キャンプ地の規模などについてはうかがい知れない。塚原期についても、ナイフ形石器などが散見される程度で、遺構は確認されなかった。縄文時代では若干の土器・石器が得られている。土器は谷部から晩期長原式の深鉢片が数点出土しているが、風化がきわめて顕著で、2次堆積したものである。石器は15点の鐵がみられるものの、早期や後・晩期のものが混在していて、まとまりのあるような状況ではない。新池遺跡内に縄文期の集落があったとは考えられない。弥生時代についても、中期の石鐵や後期の甕片が採集された程度で、定住的な集落はみられない。

古墳時代前期～中期(谷部での墓地形成)

古墳時代前期の遺構としては、谷部で検出した土坑類・沼沢地および落ち込みがある。土坑は5基検出した。そのなかの4基は集石遺構とでもいうべきものであるが、12号土坑で庄内式併行期の甕が供獻されていたことから、いずれも墓壙と判断される。もっとも遺存状態の良い14号土坑から推すと、他の3基についても、もうすこしは深かったものとみられる。なおこの種の墓壙については、近隣の地域に類例をみない。

ついで沼沢地からは布留式Iの土器が出土している。上記の土坑はあたかもこの沼の縁辺に配したかのように分布することから、布留式以前にすでに沼地は形成されていたとおもわれる。また沼沢地の西側の1号落ち込みには布留式の古相の完形土器が埋蔵されていて、これについても墓壙になるのかも知れない。布留式の新相になると沼沢地は完全に埋積したとみられ、上面にはやはり墓壙(16号土坑)が供獻土器の壺をともなって検出されている。

この時期の新池遺跡は谷部の一画をながらく墓地として利用されていたことがうかがえ、ちかくに集落が営まれていたものとおもわれる。いまのところ土室遺跡群_m内に古墳時代前期の集落は未検出で、今後の調査に期待される。また遺跡周辺はシイ・カシ林を主体とする森林が広がっていて、沼はシダ植物に覆われていた(第4章第1節IV項、H・G・F帶)。

古墳時代中期～後期(埴輪製造所の開設から埴輪供給基地へ)

中期の中頃に新池遺跡の西南約1kmのところで巨大古墳(太田茶臼山古墳)が築造されることになり、3基の半地下式埴輪窯(A群)と3基の工房および工人集落からなる埴輪製造所がほとんど未開の段丘部に開設される(新池A期=円筒埴輪IV期・須恵器ON46型式・土師器布留式V)。埴輪窯はそれまで墓地であったところのすぐ北側に築かれ、灰原は墓地の一面を切り崩すように設けられるなど、状況が一変する。操業開始とともに、段丘部は粘土の採掘と燃料の調達によって急速に開平されたものとおもわれ、谷部に最初の土石流(5号溝)が発生する。

太田茶臼山古墳の完成後、新池遺跡での埴輪製造は一時期頓挫するが、その後、地下式埴輪窯(B群)をあらたに設営し、生産が再開される(新池B期=円筒埴輪IV期・須恵器TK208型式・土師器布留式V)。この時期の工房群は窯場の移設に連動して西側の谷部に移ったものとみられるが、工人集落は引き続き段丘東南部に営まれている。A期・B期をとおして、シイ・カシが薪として、つぎつぎに伐採されていたことが予察される。

B期の埴輪生産終了後、しばらくの間は休窯期に入る。

ついで後期の前半頃に新池遺跡の東南約1kmのところで、大形の前方後円墳(今城塚古墳)が築造されることになり、B群窯の北側に地下式埴輪窯(C群)が開設される(新池C期=円筒埴輪V期・須恵器MT15型式)。調査区内に工房群・工人集落は検出されず、谷部にある1号井

埴輪	須恵器	土師器	段丘部	谷部	古墳	植生の変化
I				12号～15号土坑 淀沢地		(シイ・カシ) コナラ垂葉 シダ
II				1号落ち込み		
III				16号土坑		
IV						
V	TK75 TK216 ON46 TK208 TK23 TK47 MT15 TK10 MT85 TK209 TK217 TK46 TK48 MT21	V	A群窯 工房群 工人集落(先) B群窯 工人集落(後) C群窯(C1) C群窯(C2) 新池古墳 伴生期灰窯(新羅土器) 水汲み場	5号溝 6号溝 7a号溝 1号井戸 8号溝 7b分溝	太田茶臼山 番山・土保山 今城塚 保神車塚	アカマツ イネ・ツバ

表46 新池遺跡の推移(遺物の区分は第3章第1節を参照)

戸のちかくに展開していたものとみられる。C期前半の埴輪生産の主力は、今城塚古墳への供給で、後半には昼神車塚古墳をはじめとする三島の諸古墳に供給している。またC期を通じて、各地へ埴輪を搬出する供給センターとしての役割を担っていたものとおもわれる。この時期の植生は、前半にはシイの減少とコナラ属の増加が顕著で、後半にはコナラ属主体の二次林に二葉松類が漸増する(E・D・C帯)。これらは薪の伐採による森林破壊が相当すんでいたことを示すもので、谷部では数回の土石流の痕跡(7a号溝・7b号溝)が観察されている。

古墳時代後期～律令期(埴輪製造所の閉鎖から集落の開発へ)

6世紀の中頃までに埴輪生産は休止し、7世紀後半の集落の成立までは、廃窯時ないしその直後に築造された新池古墳(須恵器TK10型式期)がみられるだけである。新池古墳はその後に一度だけ追葬されている(須恵器TK209型式期)。

7世紀後半になると大規模な開発がおよび、段丘一帯に南群・中央群・北群からなる集落が展開する。南群は工人集落の跡地を踏襲するが、中央群と北群はこの時期にあらたに開平している。このとき開拓谷に木棺が投棄され、同時に木棺を埋葬していた古墳や新池古墳も削平されたとみられる。このころになると、さらなる開発によってアカマツ林が増加し、森林破壊はますます進行していく(B・A帯)。また、イネ属・ソバ属の花粉化石が一定量検出され、段丘上に農耕地のあったことが証されている。

注

1. 森田克行1989「土室遺跡群の発掘調査について(その1)」「大阪府下埋蔵文化財研究会(第19回)資料」

(財)大阪文化財センター

おわりに

昭和63年9月からおよそ20ヶ月をかけて発掘調査した新池遺跡は、日本最大の埴輪工房をはじめとする良好な埴輪生産遺構群を検出したことで、速く注目された遺跡であった。出土した埴輪は優に1万点をこえ、調査直後からおこなった整理作業でもなかなか全容がつかめず、五里霧中といった感じで取り組んできた。それでも整理員の方々の資料化の努力と同僚諸氏の助力もあって、何とか整理の道筋がたち、当初の目論見をうわまわる成果があがってきた。その一々は本文にゆづるとしても、埴輪窯・工房・工人集落の連関については、ひととおりの解明ができたとおもっている。

新池遺跡の調査の真髄はなんといっても、「藍野陵」とのかかわりであろう。本書では継体とその陵について、いささかも述べるところはなかったが、すくなくとも新池A期の埴輪が太田茶臼山古墳に、新池C期の埴輪が今城塚古墳に供給されていたことは提示できたとおもう。それとともに、A期の埴輪生産が須恵器の編年研究にいうON46型式に定点をもち、同じくC期がMT15型式に接点を見いだせたことは大きな収穫であった。継体と三島のつながりについても、むしろ新池遺跡の評価が定まってから論議を尽くしたいとおもう。

最後に、現地調査とその後の整理作業について、さまざまな助言と協力をいただいた多くの市民の方々・研究者各位に、こころよりお礼申し上げる次第である。

1号室		調				施成			地土		ベンガラ						
		香 料 類	清 酒	淡 酒	不 好 味	灰 白	新 苦 味	新 灰 味	種	良	秋 耕	根 網	細 根	粗 根	米 糞	西 南	
1区	床面	円筒	6	3	2			1		1	1	4	3	3	2	1	
		朝顔形	3	2	1						3		3				
		形 象															
	堆積 土層	小計	9	5	3			1		1	4	4	6	3	2	1	
		円筒	7	2	1	4				1	4	2	4	3	1	1	
		朝顔形															
	地盤 土層	形 象															
		小計	7	2	1	4					1	4	2	4	3	1	
		合計	16	7	4	4		1		2	8	6	10	6	3	2	
2区	床面	円筒	32	7	1	1	8	14	1	1	29	2	8	18	6	2	
		朝顔形	4	3							4		4				
		形 象															
	堆積 土層	小計	36	10	1	1	8	15	1	1	33	2	8	22	6	2	
		円筒	21	4	1		4	11	1		15	6	1	12	8	2	
		朝顔形	2			1	1				1	1	2			1	
	地盤 土層	形 象															
		小計	23	4	1	1	5	11	1		16	7	1	14	8	2	
		合計	59	14	2	2	13	26	2	1	49	9	9	36	14	4	
3区	床面	円筒	22	6	14	2	2	3		3	20	4	1	23	3	8	
		朝顔形	10	8		1					10			9	1	3	
		形 象															
	堆積 土層	小計	37	14	14	3	3	3		3	30	4	1	32	4	11	
		円筒	35	5	13	5	6	2	3	1	8	20	7	3	24	8	
		朝顔形	3	1							1	2	1	2		1	
	地盤 土層	形 象	1											1	1		
		小計	39	7	14	5	6	2	3	2	9	22	8	4	26	9	
		合計	75	21	28	9	2	6	2		12	52	12	5	58	13	
4区	床面	円筒	48	20	8	1	17	2		5	32	11	1	35	12	15	
		朝顔形	11	7	1		3				11			11		3	
		形 象															
	堆積 土層	小計	59	27	9	1	20	2		5	43	11	1	46	12	15	
		円筒	36	9	3		5	1		2	18	6	2	18	6	4	
		朝顔形	3	1	1						3			3		2	
	地盤 土層	形 象															
		小計	29	10	4		6	1	8		2	21	6	2	21	6	
		合計	88	37	13	1	26	1	10		7	64	17	3	67	18	
5区	床面	円筒	70	22	3	2	16	21	1	1	62	7		66	4	20	
		朝顔形	14	4		1	3	4	2		3	10	1		12	2	
		形 象															
	堆積 土層	小計	84	31	3	3	19	25	3		4	72	8	78	6	21	
		円筒	74	28	7	2	13	22	1	1	2	48	24	7	49	27	
		朝顔形	9	3	3	1		2			8	1	8	1	1		
	地盤 土層	形 象															
		小計	83	31	10	2	14	24	1	1	2	56	25	7	48	28	
		合計	167	62	13	5	33	49	4	1	6	128	33	7	126	34	
6区	床面	円筒	5	1			3	4			5	3	2	3	3	2	
		朝顔形															
		形 象															
	堆積 土層	小計	8	1		3		4			5	3	2	3	3	2	
		円筒	73	9	13	13	8	4	20	6	5	52	16	11	44	18	
		朝顔形	4			1		3	1		3	1	1	3		1	
	地盤 土層	形 象	3											1	2	1	
		小計	80	9	13	16	9	4	22	7	8	56	16	12	48	20	
		合計	168	10	13	16	12	4	26	7	8	61	19	14	51	23	
總合計		494	151	73	32	97	7	118	15	1	36	362	96	38	348	108	
															93	63	

1号	タ ガ ガ			
	分	類	形	状
1	2	3	4	M 台
床	23	13	1	57 53

2号	タ ガ ガ			
	分	類	形	状
1	2	3	4	M 台
床	144	45	3	164 32

3号	タ ガ ガ			
	分	類	形	状
1	2	3	4	M 台
床	102	78	2	7 127 62

表47 A群窓埴輪集計表(1)

2号窓		色調									地成			粒土					
		赤 茶 緑	洋 紫 青	黄 紫 青	白 灰 灰	青 紫 灰	暗 灰 灰	暗 褐 褐	褐 良	秋 秋	細 粗	粗 粗	表 表	内 内	内 内				
1区	床面	円筒	22		2	13	1	5	1			3	13	6	3	15	4	3	
		朝顔形	1		1							1			1				
		形象	2		1	1						2		2	2		2		
	堆積 土壌	小計	25		4	14	1	5	1			3	14	8	3	15	4	5	
		円筒	12		9	2		1				1	5	6		8	4		
		朝顔形	2		2							2			2				
2区	床面	形象																	
		小計	14		9	4		1				1	7	6		10	4		
		合計	39		13	18	1	6	1			4	21	14	3	28	8	5	
	堆積 土壌	円筒	30		11	18			1			18	12			22	8	2	
		朝顔形																	
		形象	1		1							1		1	1		1		
3区	床面	小計	31		11	19			1			18	13		23	8	3	1	
		円筒	4		4							1	3		2	2	3	1	
		朝顔形																	
	堆積 土壌	形象																	
		小計	4		4							1	3		2	2	3	1	
		合計	35		11	23			1			19	16		25	10			
4区	床面	円筒	42		22	16	1	1	1			1	2	21	19	3	15	15	3
		朝顔形	3		1							2	1	2		1			
		形象	6		4	2						2	4		1	6	3	1	
	堆積 土壌	小計	51		26	19	1	1	1			3	3	23	25	3	17	21	6
		円筒																	
		朝顔形																	
5区	床面	形象	1			1						1		1					
		小計	1																
		合計	52		26	19	1	2	1			3	3	24	25	3	18	21	6
	堆積 土壌	円筒	304	9	82	94	4	10	2			2	8	130	66	11	152	41	4
		朝顔形	21		13	4		2				2	3	10	8	1	17	3	1
		形象	11		6	3		1				2	9		3	8	4	2	
6区	床面	小計	236	9	101	101	4	12	3			4	11	142	83	12	172	52	9
		円筒	55	7	24	19	3		2					32	23		40	15	1
		朝顔形	9		6	2			1			1	1	7		7	2	4	
	堆積 土壌	形象																	
		小計	64	7	30	21	3		2			1	33	30		47	17	1	
		合計	300	16	131	122	7	12	5	1	2	4	12	175	113	12	219	69	20
5区	床面	円筒	98		42	44	1	9	1			1	7	73	16	13	79	6	5
		朝顔形	11		2	5	1	2				1	2	7	2		8	3	5
		形象	6		2	4						4	2		3	3	2	2	
	堆積 土壌	小計	115		46	53	2	11	1			3	9	84	22	13	90	12	8
		円筒	132	10	58	49	3	8				1	9	67	56	17	73	42	5
		朝顔形	11	1	6	2						2	2	3	6	7	4	8	
6区	床面	形象	2		1	1							1	1		1	1		
		小計	145	11	66	52	3	8				3	11	71	63	17	81	47	5
		合計	260	11	112	105	5	19	1			5	20	155	85	30	171	59	17
	堆積 土壌	円筒	82		30	43	2	10	2	1	1	1	2	18	59	5	21	61	12
		朝顔形	13		3	7		2		1			3	10		2	19	1	3
		形象	7		5	1	1					5	2		5	2	2	2	
6区	床面	小計	102		23	55	3	13	2	1	2	1	2	21	74	7	23	76	3
		円筒	103	2	36	31	9	16	4	1	1	2	1	16	53	34	17	76	19
		朝顔形	9		2	5	1	1				5	4	2	5	2	2	5	
	堆積 土壌	形象	5		3	1	1					1	2	2		5		3	
		小計	117	2	41	37	11	17	4	1	1	2	1	17	60	40	19	77	21
		合計	219	2	64	92	14	30	6	2	3	3	3	38	134	47	42	153	24
総合計		905	29	257	379	26	69	15	3	7	3	15	77	528	300	90	624	191	72

表47 A群窓埴輪集計表(2)

3号窓		西										東			北				
		高 度	低 度																
1区	床面	円筒	42	2	8	2	27	2		1		8	30	4	31	28	3	2	
		朝顔形	4		1				2			4			4			1	
		形象	1	1								1			1				
		小計	47	3	9	3	27	2		3		8	34	5	31	32	4	2	
	堆積土層	円筒	33	5	13	3	7	3	1	1		6	19	8	9	22	2	3	
		朝顔形	1				1					1			1				
2区	床面	円筒	36	5	13	3	7	4	1	1		6	20	8	9	23	2	2	
		朝顔形	8	1					2	1		14	54	13	20	55	6	4	
		形象	2	2								1	7		1	7		4	
		小計	85	5	30	9	31	4		5	1	15	64	6	23	56	6	8	
	堆積土層	円筒	25	2	8	6	5	2		2		4	17	4	6	15	4	3	
		朝顔形	2	1	1							1	1	1		1			
3区	床面	円筒	3	8	7	5	2		2			4	18	5	7	16	4	3	
		朝顔形	17	1	8	5			3			19	82	11	30	72	10	11	
		形象										14	3	1	15	1		6	
		小計	111	11	49	11	74	9	2	8		23	128	15	80	97	7	26	
	堆積土層	円筒	19	2	9	1	5	1		1		3	15	3	1	16	2	1	
		朝顔形	3	2	1							1	2		2	1	1	1	
4区	床面	円筒	22	4	9	2	5	1		1		3	14	5	1	18	3	2	
		朝顔形	10	41	11	69	9	2	5			23	114	10	59	82	6	26	
		形象	1	8								14	3	1	15	1		6	
		小計	164	11	49	11	74	9	2	8		23	128	15	80	97	7	26	
	堆積土層	円筒	19	2	9	1	5	1		1		3	15	3	1	16	2	1	
		朝顔形	3	2	1							1	2		2	1	1	1	
5区	床面	円筒	25	2	1	1	7	3		6	4	1	12	12	1	10	14	1	5
		朝顔形	3		3							3			3				
		形象																	
		小計	28	2	4	1	7	3		6	4	1	12	15	1	10	17	1	5
	堆積土層	円筒	113	7	12	11	35	1		25	21	1	32	69	12	23	84	6	9
		朝顔形	9		4	3	2					1	7	1	2	7		4	
6区	床面	円筒	3		2	1							2			2			
		朝顔形	1										1			1			1
		形象																	
		小計	25	2	4	1	7	3		6	4	1	12	15	1	10	17	1	5
	堆積土層	円筒	113	7	12	11	35	1		25	21	1	32	69	12	23	84	6	9
		朝顔形	9		4	3	2					1	7	1	2	7		4	
7区	床面	円筒	153	7	12	17	38	4		25	21	1	33	78	14	25	94	6	13
		朝顔形	50	6	12	6	12	5		2	6	1	4	32	14	3	35	12	7
		形象	14	1	3	2	3						6	35	17	3	39	16	7
		小計	258	8	13	6	13	6		31	25	2	45	93	15	35	111	7	18
	堆積土層	円筒	1										1			1			
		朝顔形																	
8区	床面	円筒	13	1	3	1	2	3		1	1		2	3	2		4	3	
		朝顔形	5		1	2	2						1	3	1		4	1	4
		形象																	
		小計	14	1	3	2	3						4	8	2	4	8	2	1
	堆積土層	円筒	13	1	3	1	2	3		1	1		4	8	2	4	8	2	1
		朝顔形																	
合計		円筒	924	74	186	74	308	58	1	108	90	5	215	594	91	278	562	64	106
合計		朝顔形																	

表47 A群窓塗輪集計表(3)

埴輪観察表凡例

部位の記号は類型

調整は別部で、記号は種別、矢印はハケの方向を表している。
タガの分類・形状は第3章第1節を参照。

色	調	3	淡褐色	7	灰白色
		4	淡茶褐色	8	暗青灰色
1	淡青灰色	5	茶褐色	9	暗灰色
2	淡黃褐色	6	暗赤褐色	10	暗褐色
c	-	a	b	d	-

1. A群窯1a号窯① (図21~27 PLATE39~41・49~51a)

遺物番号	出土地点	器物種類	部位	調整				タガ				スカンガラシ孔	色	焼成土	法量(cm)	接合状況	備考		
				口	肩	底	外	内	幅状	計測(mm)									
										a	b	c	d						
1	床面	B1	○	7	Bc-1	ナデ	1	M	16	26	12	12	○	1	良 細	口徑71.1 底径64.2 乳点分接合 底面無	大型 ハラ記号あり		
2	床面	B1	○	8	Bc-1	ナデ	1	M	12	21	10	10	○ ○ ○	2	硬 細	口徑64.2 底径59.8 乳点分接合 底面無	大型 ハラ記号あり		
3	床面	A2	○	10	—	ナデ	1	M	12	24	9	7	○	4	良 細	口徑30.8 底径28.8 4点分接合	ヘラ記号あり		
4	床面	A3	○	9	Bb-1	ナデ	1	台	13	25	18	12		7	良 微細	口徑41.4 底径38.2 5点分接合 底面無	ヘラ記号あり		
5	床面	A3	○	7	Bb-2	ナデ	1	M	13	24	12	10	□ ○	4	良 細	口徑38.2 底面無			
6	床面	A3	○	5	Bb-1	—							○ ○	2	良 細	口徑43.8			
7	床面	B1	○ ○	5	Bb-1	—	1	M	14	25	13	11	□ ○ ○	1	良 細	口徑51.1 底径48.8 4点分接合 底面無	左巻きづくり		
8	床面	A5	○	8	Bb-1	—	2	台	8	18	10	11	○	7	良 細	口徑30.1 底径28.8 3点分接合			
9	床面	B3	○	7~9	Bb-1	ナデ	1	台	10	20	10	10		1	良 細	口徑35.8 底径33.8 3点分接合 底面無	ハラ記号あり 盆と同一側体		
10	端面	A5	○	7	Bb-1	—	1	台	12	22	15	13	○	2	良 細	口徑31.7 底点分接合			
11	端面	A1	○	8	—	ナデ								3	良 微細				
12	端面	A1	○	7	—	ナデ							○ ○	2	硬 細				
13	床面	A3	○	6	—	—								4	良 細				
14	床面	A2	○	—	—	ナデ								4	良 細	2点分接合			
15	床面	B1	○	5	Bb-1	ナデ								1	軟 粗				
16	端面	A5	○	6	—	ナデ								2	良 粗				
17	端面	A5	○	7	—	—								1	良 粗				
18	床面	A6	○	7	—	ナデ								1	良 粗				
19	端面	B3	○	—	—	—								8	良 粗				
20	床面	B2	○	6	Bb-1	—							○ ○	1	良 粗				
21	床面	B2	○	8	Bb-1	ナデ							○ ○	2	軟 粗				
22	床面	B2	○	—	—	—							○ ○	2	良 粗				
23	床面	○	6~8	Bb-2	—	1	M	11	22	10	8	○	2	良 粗	腹径44.2 底径41.2 2点分接合	9と同一側体			
24	端面	○	4	—	ナデ	1	M	10	21	11	12		8	硬 微細		3点分接合			
25	床面	○	4~5	—	ナデ								□ ○	7	良 粗				
26	床面	○	6	*	ナデ	2	M	13	23	11	7	○	2	良 粗					
27	床面	○	4	—	ナデ	3	台	12	20	12	12	○ ○ ○	1	軟 粗					
28	床面	○	6	—	ナデ	3	M	11	15	10	10		7	良 粗					
29	端面	○	4~5	—	—	2	台	15	27	14	13	○	1	軟 粗					
30	床面	○	4	—	ナデ	2	M	12	22	9	8		1	軟 粗					
31	床面	○	4	—	ナデ	2	台	16	25	10	10	○	1	軟 粗					
32	端面	○	6	—	—	—								7	軟 粗				
33	床面	○ ○	5	—	—	1	台	12	27	13	10		1	軟 粗		4点分接合			
34	床面	○ ○	—	ナデ	ナデ	1	台	14	26	10	12		1	良 粗	底径34.0	4点分接合			
35	床面	○	6	—	ナデ									7	良 粗				

表48 墓輪観察表(1)

1. A群窯 1a号窯②

遺物 番 号	器 種	出 土 地 点	部 位		調 整		タ ガ				ス カ シ 孔	ペ ン ガ ラ 外 内	色 焼 成 土	法 量 (m)	接合状況	備 考						
			口	底	本/m	外	内	計測 (m)														
								a	b	c	d											
36	床面	○	-	楕円ナデ								1	軟	粗								
37	円床面	○										1	軟	粗								
38	床面	○	5-6	-	ナデ							4	良	細		2点分接合						
39	粘土	○	7	-	ナデ							4	良	細								
40	灰層	○	9	-	ナデ							6	硬	細								
41	床面 A1	7	↑	←								1	良	粗	口徑72.8	跡跡、115.5 等高線						
42	床面 B2	6	←	←								2	良	細	口徑76.7	9点分接合						
43	床面	○	6-8	Bb-1	ナデ	1	M	18	26	9	8	○	○	2	良	細	周部径37.1 16点分接合					
44	床面 A2	7	楕ナデ	-								○	○	7	硬	細						
45	床面 A2	-	楕ナデ	ナデ								○	○	2	軟	細						
46	床面 A2	-	楕ナデ	楕ナデ								3	硬	細		2点分接合						
47	床面 A2	8	楕ナデ	楕ナデ								○	○	2	良	細						
48	床面 A1	-	楕ナデ	楕ナデ								○	3	良	細		小型					
49	床面 A1	6	←	ナデ								○	○	1	軟	粗						
50	床面 A1											○	○	8	硬	細						
51	床面	○	7	↑	←							○	○	4	良	細	2点分接合					
52	床面	○	6-7	←	↑							○	○	4	良	細	2点分接合					
53	床面	○	8	-	ナデ							○	4	良	細							
54	床面	○	10	-	ナデ	3	M	13	25	12	13	○	1	良	細							
55	床面	○	7	-	ナデ	1	白	11	22	10	9	○	4	良	細							
56	床面	○	7	-	ナデ	1	白	12	26	10	9		1	軟	粗		2点分接合	ヘラ記号あり				
57	円床面 A3	7	Bb-1	ナデ								7	良	細		2点分接合	ヘラ記号あり					
58	床面	○	-	ナデ	ナデ							○	4	良	細		ヘラ記号あり					
59	糊	○	6	-	ナデ	1	M	10	20	9	8		4	良	細		ヘラ記号あり					
60	糊	○	-	-	ナデ							2	良	細			ヘラ記号あり					

遺 物 番 号	器 種	出 土 地 点	種 類		ペ ン ガ ラ		色 焼 成 土	遺 物 番 号	器 種	種 類		ペ ン ガ ラ		色 焼 成 土				
			外	内	外	内				外	内	外	内					
61	堆積土	家(基礎部)					3	良	細	65	形	堆積土	○	○	3	硬	粗	
62	形	堆積土 器財	○		1		1	良	細	66	堆積土	器財	○	○	1	良	細	
63	象	堆積土 その他					3	良	細	67	象	堆積土 器財	○	○	1	良	細	
64		床面 器財					3	硬	微細									
65		床面 その他	○	○	1		1	良	細									

表48 地輪観察表(2)

2. A群窯 1号窯 (図28、PLATE51 b)

遺物 番 号 種 類	出 土 地 点	部 位	調 整		タ ガ				ス カ シ 孔		ペ ン ガ ラ		色	焼 成 土	法 基 (cm)	接合状況	備 考				
			口	網	底	分 形		計測 (mm)				外	内								
						a	b	c	d												
66	床面 A3		—	—	ナデ							1	良	細							
69	雨戻上 A3		—	—	ナデ							2	硬	微粗							
70	雨戻土 A5		—	—	ナデ							1	良	細							
71	円 床面 B2		—	—	ナデ					○	○	2	良	細							
72			—	—	ナデ					○	○	1	良	細							
73	武層 ○	6	—	ナデ	2 M	11	25	10	8	○		3	硬	微粗							
74	雨戻土 ○	6	—	ナデ	1 M	14	22	12	12			7	良	細							
75	瓦層 ○	6	—	—	1 台	12	22	10	8			4	良	細	3点分接合						
76	瓦層 ○	6	—	ナデ	3 M	12	22	9	9			4	良	細							
77	瓦層 ○	8	—	ナデ								4	硬	細							
78	瓦層 ○	—	—	ナデ								6	硬	細			右巻きづくり				
79	雨戻土 A1	7	ナデ	ナデ						○	○	6	良	細	2点分接合						
80	朝 武層 A1	—	ナデ	ナデ						○	○	3	硬	微粗							
81	朝 雨戻土 ○	6	—	?								1	軟	粗							
82	形 武層 ○	6	—	?						○	○	7	良	粗							
83	雨戻土 ○	6~8	—	—								4	良	細	3点分接合						

3. A群窯 2号窯① (図32~43・45・46、PLATE41~43・52~58)

遺 物 番 号 種 類	出 土 地 点	部 位	調 整		タ ガ				ス カ シ 孔		ペ ン ガ ラ		色	焼 成 土	法 基 (cm)	接合状況	備 考				
			口	網	底	分 形		計測 (mm)				外	内								
						a	b	c	d												
1	床面 A3 ○	5 Bb-1 ←	1	M	21	32	10	10	○	○	3	良	細	口径52.0	8点分接合	大型					
2	床面 A2 ○	8~11 Bb-1 ←	1	M	18	28	9	11	○		5	良	細	口径50.0	雨戻土、雨戻、粗	大型					
3	床面 ○	6 Bb-2 ←	1	M	17	28	9	8	○	○	3	良	細	直径42.8	雨戻分接合	大型					
4	床面 ○ ○	5~6 Bb-2 ナデ	1	M	18	30	10	8	○	△	3	良	微細	底径34.0	雨戻 底径と接合	大型 左巻きづくり					
5	床面 A1 ○	3~6 Bb-1 ←	1	M	12	27	12	10	○		3	良	微細	L1径37.6	底点分接合						
6	床面 A1	7 ナデ	ナデ							○	○	2	良	細							
7	床面 A3	9	—	—								2	良	粗							
8	床面 A2	6	—	—								3	良	細							
9	円 床面 A2 ○	8 ↑ ↘ 1	M	11	25	12	10					4	良	細		1次調整のみ					
10	床面 A2	9	—	ナデ								3	良	細	2点分接合						
11	雨戻土 A2	7 ↑ ←										3	良	細		1次調整のみ					
12	朝 雨戻土 A2	11	—	—								2	良	細							
13	雨戻土 A2	8 ←	—							○	○	2	軟	細							
14	床面 A2	10	—	ナデ								3	硬	細	2点分接合						
15	床面 A3	8 ↑	ナデ									2	良	細		1次調整のみ					
16	雨戻土 A4	7	—	—						○	○	6	硬	細							
17	床面 B1	9 ↑	←									3	硬	微細							
18	雨戻土 A6	8	—	—								2	良	細							
19	床面 B1 ○	11 ← 2 台	13	25	15	12	○					3	良	細	口徑43.0	2点分接合					
20	雨戻土 ○	9 ↑ ↗	ナデ									3	硬	微細		1次調整のみ					

表48 塙輪観察表(3)

3. A群落 2号窓②

遺物番号	出土場所	部位	調査		タガ				スカラシ		色		焼成		法量(m)	接合状況	備考			
			分類	形状	計測(mm)				バンガラ孔外	バンガラ孔内	色外	色内	焼成度	土						
					a	b	c	d												
21	床面	○	9	—	ナデ	1	M	11	21	9	8	3	硬	微細						
22	床面	○	7	↑	—							3	硬	細	3点分合	1次調査のみ				
23	床面	○	8	↑	—							3	良	細		1次調査のみ				
24	床面	○	6	Bb-1	ナデ	1	台	16	24	9	8	○	3	良	微細	旗仔35.1	13点分合 ヘラ記号あり			
25	床面	○	8	—	ナデ	1	M	12	19	8	6		2	良	細					
26	床面	○	8	—	ナデ	1	M	14	22	8	7		2	良	細					
27	床面	○	5	—	ナデ	2	M	11	21	12	13	○	○	3	良	細				
28	床面	○	15	—	ナデ								3	良	細					
29	床面	○	6	—	?								5	良	細					
30	床面	○	6	—	ナデ	1	M	11	20	10	8		6	硬	微細					
31	床面	○	—	—	ナデ	2	M	15	25	10	9	○	3	硬	微細					
32	床面	○	9	—	ナデ	2	M	14	24	13	12	○	○	6	硬	微細	タガの側面付近あり 2点分合			
33	床面	○	7	Bb-1	ナデ	1	M	15	16	10	8	○	○	5	硬	微細				
34	床面	○	11	—	ナデ	2	M	13	19	8	6	○		3	良	細				
35	床面	○	—	—	ナデ	3	M	14	19	13	15			2	良	細				
36	床面	○	9	—	ナデ	1	M	10	20	10	11	○		10	硬	微細	2点分合			
37	床面	○	5	—	?	—	—	—	23	—	—	○		3	良	細				
38	床面	○	9	Bb-1	↑	1	M	12	22	11	9	○		8	硬	微細				
39	床面	○	9	—	ナデ	1	M	11	19	14	11			6	硬	微細				
40	床面	○	—	—	ナデ	3	M	14	21	16	15			3	良	細				
41	床面	○	5	Ba	ナデ	1	M	20	—	—	10			2	軟	細				
42	床面	○	5	—	ナデ	1	M	15	27	11	9			3	良	細				
43	床面	○	6	—	ナデ	2	M	15	18	12	10	○		6	良	細				
44	床面	○	—	—	ナデ	3	M	22	32	16	17	○		3	軟	細	大型			
45	床面	○	6	—	ナデ	1	M	11	21	6	6			4	良	細				
46	床面	○	8	—	ナデ	1	M	12	24	10	10	○		3	良	細	4点分合			
47	床面	○	7	Be	ナデ	1	M	13	23	8	7	○		3	硬	微細	2点分合			
48	床面	○	5~6	Bb-2	ナデ	2	M	19	30	13	12	○		8	良	細				
49	床面	○	9	Bb-2	ナデ	2	台	14	18	8	6	○		5	硬	微細				
50	床面	○	6~10	Be	ナデ	1	M	17	27	11	9			3	良	細	3点分合 大型			
51	床面	○○	8	Be	ナデ	1	M	12	21	9	8	○		3	良	細	底径31.5 4点分合 右巻きづくり			
52	床面	○	9	Bb	ナデ								5	硬	微細					
53	床面	○	7	Bb	—								2	良	細					
54	床面	○	10	—	ナデ								9	硬	微細					
55	床面	○	9	Be	ナデ								3	硬	細					
56	床面	○	8	Be	ナデ								3	良	細		大型			
57	床面	○	12~16	Bb	ナデ								9	硬	細					
58	床面	○	7	Bb-1	ナデ								5	良	細					
59	床面	○	7	Be	ナデ								3	良	細					
60	床面	○	3~5	Bb	ナデ								3	良	細					

表48 填輪観察表(4)

3. A群窓 2号窓③

遺物 番 号	器 種	出 土 地 点	部 位	測 定				タ ガ				ス カ シ 孔	色	焼 跡	法 量 (cm)	接合状況	備 考						
				分 類	形 状	計測 (mm)		外 側	内 側														
						a	b	c	d														
61	陶土	○	5 Bb ←									2	軟	粗			右巻きづくり						
62	床面	○	5~6 Bb-1 ナゲ								△	3	良	細			大型						
63	床面	○	4 ↑ ナゲ									2	良	細			1次調整のみ						
64	床面	○	12 ↑ ナゲ									2	良	細			1次調整のみ						
65	床面	○	5 ↑ ←									5	硬	粗	2点分接合		1次調整のみ 右巻きづくり						
66	床面	○	9 ナゲ ナゲ									5	硬	細									
67	焼け	○	8 ナゲ ナゲ									8	硬	微粗									
68	陶土	○	10 ナゲ ナゲ									3	硬	微粗									
69	床面	○	11 ↑ ナゲ									3	硬	粗			1次調整のみ						
70	床面	○	8 ナゲ ナゲ									5	硬	微粗									
71	床面	○	— ナゲ —									3	良	細									
72	門	床面	○	9 ← ナゲ								2	良	細			底面に小石様の 柱頭、柱頭間にハラ状工具 の痕跡						
73	床面	○	4 (火面) ナゲ ナゲ									2	良	細			小型 右巻きづくり						
74	陶土	○	9 Bb-1 ナゲ 1 M 10 19 7 6 △○									5	硬	細	頂面 腹面 18.0 底面 14.6	1次調整 1針付 底面 3点分接合							
75	床面	○	9 Bb-1 ナゲ 1 M 9 21 8 7									2	良	粗			小型 右巻きづくり						
76	床面	○	— — ナゲ 1 台 10 20 8 6 ○									2	軟	粗			小型						
77	床面	○	9 ← ナゲ									1	軟	粗			小型						
78	床面	○	— — ナゲ 1 M 7 18 7 5									2	良	細			小型						
79	床面	○	5 ← ナゲ 1 M 13 23 9 8									2	軟	粗			小型						
80	床面	○	9 ← ナゲ 1 M 11 22 13 7									2	軟	粗			小型						
81	床面	○	11 ← ナゲ 1 M 9 19 6 5									2	軟	粗			小型						
82	床面	○	7 ← ナゲ 2 M 13 18 7 5 ○									5	良	細			小型						
83	床面	○	9 ← ナゲ 1 M 15 24 8 6									3	良	細			小型						
84	陶土	○	6 ← ナゲ									3	良	細			小型						
85	床面	○	— — ナゲ 1 M 12 23 11 10									2	良	粗			小型						
86	陶土	○	7 ← ナゲ									2	良	細			小型 右巻きづくり						
87	床面 A1	10 ↑ ←									○ ○	3	良	細	口径84.6	3点分接合	大型						
88	床面 A1	—	横ナゲ 横ナゲ								○ ○	2	良	細									
89	床面 A1	—	横ナゲ —									2	良	細									
90	陶土 A1	8 ↗ ←									○ ○	3	良	粗									
91	陶土 A1	9 ↑ 横ナゲ	—								○ ○	5	硬	微粗									
92	灰陶 B1	10 ← ←									○ ○	1	軟	細									
93	陶土 B1	10 ← ←									○ ○	2	良	細									
94	床面 B1	6 ← ナゲ									○ ○	2	良	細									
95	陶土 B1	6 ← ナゲ									○ ○	2	良	細	2点分接合								
96	床面 ○	6 ← ナゲ									○ ○	7	硬	細									
97	床面 ○	10 ← ナゲ									○ ○	8	硬	細									
98	陶土 ○	10 ↑ ←									○ ○	3	良	微粗									
99	床面 ○	8 ← ←									○ ○	5	硬	微粗									
100	床面 ○	5~6 ← ナゲ									○	5	硬	微粗									

表48 墓輪観察表(5)

3. A群窯 2号窯④

遺物 番 号 種 類	出 土 地 点	部 位	調 査					タ ガ		ス カ シ 孔	バンガラ 外 内	色 焼 成 土	法 量 (cm)	総合状況	備 考		
			分 形 計測 (mm)					a	b								
			II	胴	底	本/cm	外 内	瓶	状								
101	床面	○		7	—	ナデ				○		3	良	細	2点分接合		
102	床面	○		—	—	—						10	硬	粗	102-105は同一個体		
103	床面	○	6	←	ナデ	1	M	12	20	8	8						
104	床面	○	6	←	ナデ	1	白	12	20	10	8						
105	床面	○	6-8	Be	ナデ	1	M	12	20	11	18				底径33.3 回転剖面図 側面右側等 右側をきり		
106	床面A3	○	9	↑	←							2	良	微細	ヘラ記号あり		
107	床面	○	11	—	←							3	良	細	ヘラ記号あり		
108	床面	○	—	—	ナデ							3	良	細	ヘラ記号あり		
109	床面	○	6	←	ナデ							2	良	細	ヘラ記号あり		
110	床面	○	7	ハケ	ナデ					○		6	良	細	ヘラ記号あり		
111	床面	○	8	←	—	2	M	17	28	12	10	○	2	良	細	3点分接合 ヘラ記号あり 大型	
112	床面	○	—	—	—							2	良	細	ヘラ記号あり 小型		
113	床面	○	6	←	ナデ							2	良	細	ヘラ記号あり 小型		
114	筒	○	5-6	←	ナデ	1	M	11	21	7	7		3	良	細	ヘラ記号あり 小型	
115	床面	○	6	←	—					○		5	良	細	ヘラ記号あり		
116	床面	○	—	—	—	1	M	10	21	7	6		3	軟	粗	2点分接合 ヘラ記号あり	
117	床面	○	—	—	Be	ナデ	1	M	13	25	10	8	□	6	硬	微細	ヘラ記号あり
118	床面	○	11	←	ナデ	1	M	12	21	8	8	○	3	硬	微細	ヘラ記号あり	
119	床面	○	9	*	ナデ								2	良	細	ヘラ記号あり	
120	床面	○	9	←	ナデ	2	M	15	24	12	11	○	○	6	良	細	ヘラ記号あり

遺物 番 号 種 類	出 土 地 点	種 類	ベンガラ		色 焼 成 土	遺 物 番 号 種 類	出 土 地 点	種 類	ベンガラ		色 焼 成 土				
			外	内					外	内					
			調	成	土				調	成	土				
121	床面	家I類			2	良	粗	136	床面	毛	○	—	3	良	細
122	床面	家I類			2	軟	粗	137	床面	毛	○	○	3	良	細
123	床面	家I類			5	良	細	138	床面	粗	○	○	5	良	粗
124	床面	家I類			3	軟	粗	139	床面	粗(矢箇部)	○		3	軟	細
125	床面	家I類			2	軟	粗	140	堆積土	粗	○	○	3	良	細
126	堆積土	家I類			5	良	粗	141	床面	粗	○	○	3	良	粗
127	床面	家II類	○		6	軟	粗	142	床面	粗	○	○	2	良	粗
128	床面	家II類	○		6	良	細	143	床面	賦?	○		3	軟	粗
129	床面	家II類			3	軟	粗	144	床面	賦	○	○	3	軟	粗
130	床面	家II類	○	○	3	軟	粗	145	堆積土	粗	○	○	4	硬	細
131	床面	家II類			2	軟	粗	146	床面	粗	○	○	3	軟	粗
132	床面	毛	○	○	2	軟	粗	147	床面	大刀	○		5-6	良	細
133	洪層	毛	○	○	8	硬	細	148	堆積土	草摺	○		2	良	細
134	堆積土	毛	○	○	3	良	細	149	床面	草摺	○		3	軟	粗
135	床面	毛	○	○	3	軟	粗	150	堆積土	草摺	○		2	良	粗

表48 塗輪観察表(6)

3. A群窯 2号窯⑤

遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色調	燒成土	胎	遺物番号	器種	出土地点	ベンガラ		色調	燒成土	胎
				外	内							外	内			
151	形 象	床面	草摺	○		3	良	細	161	堆積土	草摺	○		2	軟	細
152		床面	草摺	○		4	良	細	162	床面	草摺	○		3	良	細
153		床面	草摺	○		3	良	細	163	床面	草摺	○		2	軟	細
154		堆積土	草摺	○		2	良	細	164	堆積土	茎			3	良	細
155		床面	草摺	○		3	良	細	165	床面	茎	○		3	良	細
156		堆積土	草摺	○		2	良	細	166	堆積土	その他の			1	軟	細
157		床面	草摺	○		2	軟	細	167	堆積土	その他の			1	軟	細
158		床面	草摺	○		2	良	細	168	堆積土	その他の			1	軟	細
159		床面	草摺	○		2	軟	細	169	床面	その他の	○		3	軟	細
160		床面	草摺	○		3	軟	細	170	堆積土	その他の	○		3	軟	細

4. A群窯 3号窯①(図51~63、PLATE43~46・59~63b)

遺物番号	器種	出土部位	タガ				スカラシ	色調	燒成土	胎	法量(cm)	接合状況	備考							
			形	計測(mm)																
				外	内	孔														
1	床面	○	10 Bb-1	ナダ	1	M	19	35	16	18	○	4	良	微細	底径47.4mm 5点分離合 ヘラ記号あり					
2	床面	○ ○	7~9 Bb-1	ナダ	1	M	18	38	18	13	○	4	良	微細	底径47.4mm 4点分離合 大型					
3	床面 A1	○	9 Bb-1	←	2	M	12	23	13	12	○ ○	8	良	微細	1J径36.0mm 6点分離合					
4	床面 A2		10	←	←						○ ○	5	良	微細	1J径40.1mm 5点分離合 ヘラ記号あり					
5	床面 A3		9~10	←	←						○ ○	1	良	細						
6	床面 A3		ナダ	ナダ	ナダ							2	良	細						
7	堆積土 A2		8	←	←							3	良	細						
8	床面 A2		7~8	←	~						○ ○	4	良	細						
9	床面 A2		7	←	←						○ ○	2	良	細	2点分離合					
10	床面 A3	○	9~10 Bb-1	←	1	M	12	26	9	8	○ ○	4	良	微細	口径44.2mm 5点分離合 ヘラ記号あり					
11	床面 A3		5	←	ナダ							4	良	細	3点分離合					
12	堆積土 A3		8	←	←							8	良	細						
13	床面 B1	○	9~10 Bb-1	~	1	M	11	22	11	10	○	4	良	細	口径36.1mm 5点分離合 ヘラ記号あり					
14	堆積土 A4		9	←	~						○ ○	3	良	細	口径45.7mm 2点分離合 ヘラ記号あり					
15	床面	○	9~12 Bb	~	1	M	15	24	14	14	○	4	硬	微細	底径42.2mm 16点分離合 ヘラ記号あり					
16	床面 B1		9	Bb	~							3	良	細	1J径48.0mm 4点分離合					
17	床面 A3		7	←	ナダ							8	良	細						
18	堆積土 B1		8	←	←							5	硬	粗						
19	堆積土 A3		ナダ	ナダ	~							2	良	細						
20	床面 A3		ナダ	ナダ	ナダ							1	良	細						
21	床面 A3		9	ナダ	ナダ							2	良	細						
22	堆積土 A4		~	~	~							2	良	粗						
23	床面 A2		9	~	~						○ ○	5	良	微細						
24	床面 A3		7	←	被けナダ							3	良	細						
25	堆積土 A4		~	被けナダ								4	良	細						

表48 墓輪観察表(7)

4. A群窓 3号窓②

測定番号	出土点	部位	調査				寸法				スパンガラ 孔	色	被覆	粘土	法量 (mm)	接合状況	備考							
			分類	形状	計測(mm)																			
					a	b	c	d																
26	櫛山B1	-	-	-												1 良 微細								
27	床面:A6	-	横ナメ横ナメ													4 良 細								
28	床面A6	6	横ナメ横ナメ													2 良 細								
29	床面A3	○	8	← ← 1 台	9	23	14	13								2 良 細	口径41.0	5点分接合						
30	床面A4	○	6	Bc ナデ	1	M	14	21	6	7	○					4 良 細	口径39.0 底径65.3	端点分接合 底点の上部づくり						
31	床面	○	9	Bb-1 ナデ	1	M	15	23	14	11	○	○				4 良 微細	口径32.6 底径50.0	底点分接合 底点の上部づくり						
32	床面	○	10	Bc ナデ	1	M	14	25	10	8	○	○				4 良 微細	口径35.0	12点分接合						
33	床面	○	11	← ナデ	1	M	15	27	12	10	○	○	○			3 良 微細		3点分接合						
34	床面	○	11	Bc ナデ	1	M	15	27	12	10	○					4 良 微細	口径35.0	7点分接合						
35	櫛山	○	10	← ナデ	1	M	13	22	8	4	○	○				4 良 微細								
36	張地	○	9~10	← ナデ							○					4 良 微細								
37	床面	○	9	Bd ナデ	1	台	12	23	8	7	○					3 良 微細								
38	床面	○	8	Bd ナデ	2	台	13	24	10	9	○					4 良 微細		4点分接合						
39	床面	○	7~8	← ナデ	1	台	11	24	12	11	○	○	○	○		4 良 細		5点分接合						
40	張地	○	9	← ナデ	1	M	11	21	10	8	○					4 良 微細		3点分接合						
41	床面	○	6	← ナデ	1	M	12	20	14	12						5 良 細								
42	床面	○	7	← ナデ	2	M	16	24	12	9						5 良 細								
43	床面	○	5	← ナデ	3	M	10	16	10	9						2 良 細								
44	床面	○	5~6	← ← 1	1	M	12	20	11	9						8 硬 微細								
45	張地	○	5	← ナデ	1	M	9	17	11	8	○					4 良 細								
46	床面	○	6	← ナデ												4 良 細		周延あり						
47	床面	○	5	← ナデ	1	M	11	18	11	11	○					3 良 細								
48	床面	○	6	← ← 4	M	14	20	12	10							4 良 細								
49	櫛山	○	7	← ナデ							□					7 硬 細								
50	床面	○	6	Bc ナデ	1	台	10	19	11	9	○					8 硬 細		2点分接合						
51	床面	○	-	← ナデ	1	台	8	21	12	11						5 硬 細								
52	床面	○	7~11	← ハケ	4	台	18	20	11	10						8 硬 細								
53	床面	○	6	← ナデ	1	M	15	20	7	7	○					4 良 細								
54	床面	○	6	Bb-2 ナデ	1	M	11	21	8	7	○					8 硬 細								
55	床面	○	7	← ナデ	2	M	14	19	7	5	○					5 良 細		3点分接合						
56	床面				2	M	13	21	10	10						4 良 微細		タガのみ 巻管手法						
57	床面				1	M	13	21	7	9						4 良 微細		タガのみ 巻管手法						
58	床面				2	M	13	24	11	10						4 良 微細		タガのみ 巻管手法						
59	床面				2	M	15	23	12	10								タガのみ						
60	櫛山				1	M	13	21	14	14								タガのみ						
61	床面				2	M	14	20	12	11								タガのみ						
62	床面	○	12	Bb-1 ナデ												4 良 微細	口径31.4	4点分接合						
63	床面	○ ○	10	Bb-1 ナデ	1	M	15	24	19	9	○					4 良 微細	底径34.8	10点分接合 右番づくり						
64	床面	○ ○	6	Bb-2 ナデ	1	M	15	25	10	8	○					4 硬 細	底径33.2	5点分接合 左番づくり						
65	床面	○ ○	9~10	Bc ナデ	1	M	14	22	9	8	○	○				4 良 微細	底径28.6	3点分接合						

表48 墓輪観察表(8)

4. A群落 3号窓③

造物番号	器種	出土地点	部位	調整								タガ				スカラシ孔	ベンガラ外 内	色調	成土	法量 (cm)	接合状況	備考								
				分類	計測(cm)																									
					形状	a	b	c	d																					
66	床面	○ ○	○ 3~6 Bb-ナデ	1 M	13	22	16	8	○							4 良	微細	底径35.8	8点分離合	左巻きづくり										
67	床面	○ ○	○ 8~11 Bb-ナデ													4 良	微細	底径33.8	4点分離合, pitの発達と偏位	右巻きづくり										
68	床面	○ ○	9~10 Be ナデ	1 M	14	26	11	10	○ ○							4 良	微細	底径38.4	11点分離合											
69	床面	○ ○ ○	9 ↑ ナデ	1 M	12	20	8	7	○							3 良	微細	底径30.1	8点分離合	1次調整のみ										
70	床面	○ ○	ナデ -													2 良	微細			右巻きづくり										
71	床面	○ ○	11 ← -													3 良	微細													
72	床面	○ ○	5 ← - ナデ													4 良	微細			右巻きあり										
73	床面	○ ○	- ナデ -													2 良	微細													
74	縫土	○ ○	7 ← ナデ													2 良	細													
75	床面	○ ○	6 ← ナデ													9 硬	粗	2点分離合	左巻きづくり											
76	床面	○ ○	6 ← ナデ													5 良	細	2点分離合												
77	円筒	○ ○	5 ← -													4 良	細													
78	床面	○ ○	7 ← - ナデ													4 良	粗	3点分離合												
79	床面	○ ○	5 ← - ナデ													1 良	粗	2点分離合												
80	床面	○ ○	10 ← - ナデ													4 微細	微細	2点分離合	左巻きづくり											
81	床面	○ ○	12 ← -													4 硬	微細													
82	床面	○ ○ ○	9 ← - ナデ	1 M	14	22	8	9								2 良	微細													
83	床面	○ ○ ○	10 ← - ナデ													4 硬	微細		右巻きづくり											
84	床面	○ ○ ○	- ナデ -													3 硬	微細													
85	縫土	○ ○ ○	10 ↑ ナデ													5 硬	粗		1次調整のみ											
86	床面	○ ○ ○	10 ↑ -													4 良	微細			1次調整のみ										
87	床面	○ ○ ○	9~10 ↑ ナデ													2 硬	微細			1次調整のみ 右巻きづくり										
88	床面	○ ○ ○	4 ↑ -													4 良	微細													
89	床面	○ ○ ○	9 ↑ -													2 硬	微細													
90	床面 A1	10 ↑ -								○ ○	4 良	微細	口径60.4	5点分離合																
91	床面 A1	7 ↑ -									8 良	粗	L1径71.2	4点分離合																
92	床面 A2	9~10 ↑ -								○ ○	4 良	粗	L1径62.0	8.5点分離合, pitの発達と偏位																
93	床面 A2	9 ↑ -								○ ○	4 良	粗	L1径62.9	5点分離合 pitの発達																
94	縫土 A1	- 備ナテ 備ナテ								○ ○	4 良	粗																		
95	朝	床面 A1	- 備ナテ -							○ ○	4 良	粗																		
96	縫土 A1	- 備ナテ 備ナテ									4 良	粗																		
97	朝	床面 A1	- 備ナテ 備ナテ								7 良	粗																		
98	縫土 A1	- 備ナテ 備ナテ									5 良	粗																		
99	床面 A1	9 ← -								○ ○	2 良	粗																		
100	形	床面 A1	- 備ナテ 備ナテ								3 良	粗																		
101	縫土 A1	- 備ナテ 備ナテ									3 良	粗																		
102	床面 B3	- ナデ -									2 良	粗									電形									
103	床面 ○	7~8 ↑ ナデ								○ ○	8 良	粗																		
104	床面 ○	5 ↑ -									2 良	粗																		
105	床面 ○	- - -								○	4 良	微細									タガのみ									

表48 埋輪観察表(9)

4. A群窯 3号窯④

遺物番号	器種	出土地点	部位	調査	タガ方				スカラシ孔	ベンガラ外	色	焼成土	法量(cm)	接合状況	備考	
					分形		計測(mm)									
					類	状	a	b	c	d						
106	灰層	○	S	ナデ	—							3	良 細			
107	磚	繩紋	○	—	—	—						3	良 細			タガのみ
108	床面	○	4	← ↗							○ ○	8	良 細			
109	壁	床面	○	—	↑ ↗						○ ○	1	良 細			
110	壁	灰層	○	5	↑	—					○	2	軟 細			
111	壁	床面	○	10	↑	—					○	9	良 粗			
112	壁	繩紋	○	—	—	ナデ					○	4	良 粗			タガのみ
113	床面	○	8	↖	ナデ						○	4	良 細			
114	粘土A2		—	—	ナデ	ナデ						2	良 細			ヘラ記号あり
115	床面	○	8	—	—	ナデ					○	8	良 細			ヘラ記号あり
116	灰層	○	6	←	ナデ						○	8	硬 細			ヘラ記号あり
117	床面	○	7~8	←	ナデ							1	良 細			ヘラ記号あり
118	壁	繩紋	○	6	←	ナデ	2	M	11	20	11	10				ヘラ記号あり
119	床面	○	11	←	*							7	軟 細			ヘラ記号あり
120	床面	○	—	—	—							1	良 細			ヘラ記号あり
121	粘土	○	—	—	—							2	良 細			ヘラ記号あり

遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ				遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ				備考				
				外		内						外	内	真	成					
				真	成	土	真					真	成	土	真					
122		床面	家				1	軟	粗	128	堆積土				3	良 細				
123	形	床面	家				1	軟	粗	129	堆積土	馬具の一部			2	良 細				
124		堆積土	大刀				7	良	細	130	埋積土	雲珠?			2	良 細				
125	象	堆積土	大刀				8	軟	細	131	堆積土	杏葉			2	良 細				
126		堆積土	臺				3	良	粗	132	堆積土	苔	○		5	良 細				
127		堆積土	臺				3	良	細											

5. A群窯 排水溝①(図67~71、PLATE47・48・65)

遺物番号	器種	出土地点	部位	調査	タガ方				スカラシ孔	ベンガラ外	色	焼成土	法量(cm)	接合状況	備考	
					分形		計測(mm)									
					類	状	a	b	c	d						
1		A3	○	8~9	←	←	2	台	13	20	8	5	○	2	良 細	口徑35.4 9点接合
2	円	A3		11	←	—	ナデ							8	硬 粗	
3		○		12	←	←	1	M	13	22	11	7	○	4	良 細	
4	筒	○		8	Bc	←	4	台	20	34	13	10		2	良 細	
5		○		4~5	←	↖						○		3	良 細	

表48 墓輪観察表10

5. A群窯 排水溝②

遺物番号	都 位 種 類	出 土 地 点	部 位	調 査	タ ガ					ス カ シ 孔	ベンガラ 外 内	色	焼 成 土	法 量 (cm)	接合状況	備 考		
					分 類 状 態	形 状	計 測 (m)	a	b									
6			口 脚	底 本/cm	外	内												
7			Bb-1	ナダ	↑	1	M	11	19	10	8	○	4	良	細			
8	円			ナダ	ナダ								2	良	細			
9		西		ナダ	ナダ								2	良	細	タガの割り付け 施設あり		
10	筒		5 Bb-1	↑	1	M	11	26	11	12	○	2	良	細	底径34.8	5点接合	左巻きづくり	
11			10	Bc	ナダ								2	良	細		右巻きづくり	
12		溝	9	Bc	ナダ	1	M	14	23	8	7		4	良	細		板状の任せ	
13	側面		A1	8	ナダ	←						○ ○	4	良	微粗	口径66.6	20mm 力耕機 ヘラ記号あり	
14				12	ナダ	←						○	2	良	微粗			
15				3	ナダ	←						○	2	良	微粗			
17			A5	8	←	←						○	4	良	細			
18				5~6	←	←	1	台	12	24	9	11	○	4	良	細		
19	円			5	←	←	1	M	13	27	10	11	○	7	良	細		
20		東		ナダ	ナダ	三角	5	18	11	9			7	良	細			
21		溝	5	Ba	←	3	M	12	22	9	7		7	硬	粗			
22			5	ナダ	ナダ	←							3	良	粗			
23			ナダ	ナダ	ナダ	←							4	良	細			
24	側面		7~12Bb-1	ナダ	2	台	8	18	12	9			2	良	細	12点接合	右巻きづくり 板状の任せ 小堀 11巻きづくり	
25	側面		—	ナダ	←								4	良	細			
26	上部			6	←	←							4	良	細		ヘラ記号あり	

遺物番号	都 位 種 類	出 土 地 点	ベンガラ					色	焼 成 土	遺 物 番 号	器 形	出 土 地 点	種 類	ベンガラ		色	焼 成 土	
			外	内	調 査	外	内							外	内			
15	素 燒	西溝 家?				3	良	細		16	瓦 蓋	西溝 器附				3	良	細

6. A群窯 1号土坑・ピット① (図72、PLATE66)

遺物番号	都 位 種 類	出 土 地 点	部 位	調 査	タ ガ					ス カ シ 孔	ベンガラ 外 内	色	焼 成 土	法 量 (cm)	接合状況	備 考		
					分 類 状 態	形 状	計 測 (m)	a	b									
1			A2	8	←	←							1	良	細			
2			5~6	←	←								4	良	細			
3			—	—	ナダ								5	硬	粗			
4			A2	8	ナダ	ナダ							4	良	細			
5	円		A2	9	←	ナダ							4	良	細			
6	筒	土	A3	9	←	ナダ				○ ○	10	硬	微粗					
7			A2	6	←	←							5	良	細			
8			A3	7	←	←							2	良	細			
9			○	10	—	ナダ	2	M	15	23	11	8	○	9	硬	微粗		
10			○	3~5	←	ナダ				○			3	硬	微粗			

表48 墓輪観察表(1)

6. A群窯 1号土坑・ピット②

遺物番号	器種	出土地点	部位	調整		タガ				スカシ		ベンガラ		色		接合状況	備考		
						計測(mm)				外		内							
				分類	形状	a	b	c	d	外	内	調査							
11	円筒	1号土坑	口	原底	木/m	外	内								3	硬	微細		
12			口	原底	木/m	外	内								7	硬	粗		
13			○	6	—ナデ	1	M	17	26	9	6	○			5	硬	微細		
14			○	5	—ナデ	2	素	14	27	9	12	○			8	硬	微細		
15			○	13	—	4	合	11	20	10	9	○			9	硬	微細		
16			○	11	—ナデ	1	M	10	22	11	9	○			4	硬	微細		
17			○	8	—ナデ	1	M	11	22	11	9	○			8	硬	微細		
18			○	10	—ナデ	1	M	16	25	11	10				4	硬	粗		
19			○	4~8	—ナデ	1	M	13	21	9	8				3	良	微細		
20			○	10	—ナデ	1	M	13	25	13	11				4	良	粗		
21			○	6	—ナデ	1	M	16	25	11	9				○	3	良	粗	
22			○	7	—ナデ							○			4	良	粗		
23			○	11	Bc	ナデ									4	良	粗		
24			○	7	Bb-2	—									4	良	粗		
25			○	6	Bb-2	ナデ									5	良	微細		
26			○	9	—	—									5	良	粗		
27			○	7	ナデ	—						○	○	2	良	粗			
28			○	8	↑	—						○	○	5	硬	微細			
29			○	7~8	—ナデ									2	良	粗			
30			P1	6	↑	—						○	○	3	良	粗			
31			P1 A2	6	—	—											3号窯と同一層		
32			P2	○	6	—ナデ	1	M	11	17	11	9			7	良	粗		
33			P2	○	—	—	—								1	良	粗		
34			P2 A2	—	—	—						○	○	4	良	粗			
35			P4	○	4~5	—ナデ	4	M	20	26	12	10	△		5	良	粗		

遺物番号	器種	出土地点	部位	種類		ベンガラ		色	焼成土	遺物番号	器種	出土地点	種類		ベンガラ		色	焼成土					
													外	内	調査								
				分類	形状	a	b						外	内	調査								
28	糞土	1号土坑	草摺	○		2	良	細		29	糞土	1号土坑	○	○	1	良	粗						

7. A群窯 灰原① (図73・74、PLATE67・68a)

遺物番号	器種	出土地点	部位	調整		タガ				スカシ		ベンガラ		色		焼成土		接合状況	備考		
						計測(mm)															
				分類	形状	a	b	c	d	外	内	調査									
1	円筒	灰原	A1	3~5	—	—								8	硬	微細					
2			A3	6	—	—								2	良	細					
3			A2	9	Bb-2	—								4	良	細					
4			A3	—	—	—								8	硬	微細					
5			A2	11	—ナデ									8	硬	微細					

表48 埋輪観察表(2)

7. A群塚 灰原②

遺物番号	出土地点	部位	調整				タガ				スカラシ孔	色	焼	胎	法量(cm)	複合状況	備考							
			分形		計測(mm)																			
			外	内	a	b	c	d	外	内														
6		A3	9	↑	ナデ							8	硬	微細										
7		A3	4	←	←							3	硬	微細										
8		A3	12	←	←							8	硬	粗										
9	内 筒	○	8	Bc	ナデ	1	台	11	19	9	8	○	○	4	硬	細								
10		○	9	←	ナデ	3	M	12	21	11	○			8	硬	微細								
11		○	9	←	ナデ	2	台	13	23	12	10			8	硬	微細								
12		○	5	Bb-1	ナデ	1	M	15	29	9	8			3	良	細	大型							
13		○	9	Bc	↑					○	○			3	良	細								
14		○	4-9	←	ナデ	1	M	9	21	9	10			8	硬	微細								
15		○	8	←	ナデ									3	良	細	お書きづくり							
16		○	5-6	←	ナデ									3	良	細								
17		A1	8	←	—							2	軟	細										
18		A1	—	—	—							8	良	細										
19		A1	—	—	—							8	硬	微細										
20	朝 鏡 形	A1	—	←	←					○	○	3	良	細										
21		A1	7	↑	←							9	硬	微細										
22		○	8	↑	—							3	良	細			スカラシ孔(?)あり							
23		○	8	↑	—							8	硬	微細										
24		○	—	—	—					○	○	8	硬	粗										
25		○	—	—	—							8	硬	粗										
26		○	6	←	ナデ					○		8	硬	粗										
27		○	10	—	—					○	○	3	良	細										
28		○	6	←	ナデ							3	良	細										
29		○	6	←	ナデ	2	M	16	24	10	8			1	軟	細	ヘラ記号あり 大柄							

遺物番号	出土地点	種類	ベンガラ		色	焼	胎	遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色	焼	胎
			外	内								外	内			
			調	成								調	成			
30	灰 原	轄(背板部)	○		1	軟	細	40	形 象	灰 原	轄			4	良	細
31		轄(背板部)			3	軟	細	41			轄			4	良	細
32		轄(矢筒部)			5	硬	粗	42			轄	○	1	軟	細	
33		大刀			8	硬	細	43			器財			4	良	細
34		大刀			8	硬	粗	44			器財			4	良	細
35		菅	○	3	良	微細	45	器財				4	良	細		
36		草摺	○	4	良	細		その他				2	良	細		
37		葦			4	良	細									
38		葦			4	良	細									
39		葦			4	良	細									

表48 墓輪観察表13

8. B群窯 4~8号窯 (図82・83、PLATE70c・71)

遺物番号	出 土 地 点	部 位	調 査	タ ガ				ス カ シ 孔	ペ ン ガ ラ	色	焼 成	胎 土	法 量 (m)	接合状況	備 考						
				分 類	形 状	計測 (mm)															
						a	b	c	d												
1		A2	○	4	Bb-1	1	M	14	25	13	○	6	良	細	11往35.1	ヘラ記号あり					
2		A1		6	~	~						4	硬	細							
3		C		6	~	~						2	良	細							
4		A3		7	~	~						4	硬	細		沈藻あり					
5		○	~	~	~	1	白	9	21	8	7		3	軟	粗						
6	内	○	~	~	ナデ	1	白	14	26	8	6	○	4	良	細						
7		○	~	~	ナデ	3	白	7	17	10	8		1	良	細	小型					
8	外	○	7	~	~	1	M	8	17	8	6		7	良	細						
9		○	14	~	ナデ	2	M	11	15	8	6		6	硬	細						
10		○	6	~	ナデ	1	白	14	19	11	10		4	硬	細						
11		○	8~10	~	~	3	M	11	13	8	6		6	硬	細	小型					
12		○	6	~	~						□		4	良	細						
13		○○	4	~	~	1	白	11	21	7	5		4	軟	粗	大型					
14		○○	6~7	~	ナデ	~	~	19	~	~	~		4	良	細	右巻きづくり					
15		B	5	~	~								2	良	細						
16		A2	10	~	~						○	○	4	軟	粗						
17		○	9	~	ナデ								4	軟	粗	小型					
18		○	5	~	~								4	硬	細	ヘラ記号あり					
23	内	A3	4~5	~	ナデ								2	良	細						
24		A2	6	~	~								2	良	粗						
25		○	7	~	~	1	M	14	23	14	15		2	良	細						
26		○○	6	~	~	1	M	15	23	7	6		4	良	細						

遺物番号	出 土 地 点	種 類		ペ ン ガ ラ	色	焼 成	胎 土	遺 物 番 号	器 種	種 類		ペ ン ガ ラ	色	焼 成	胎 土	
		調 査	計 測													
19	形	灰原上層	臺(立ち台飾り)		3	良	細	21	形	灰原上層	臺(卓脚部)		5	硬	細	
20	象	灰原上層	臺(余縁部)		2	軟	細	22	象	灰原上層	人物(ミズタ)		4	良	細	

9. C群窯 9号窯① (図88・89、PLATE74)

遺物番号	出 土 地 点	部 位		調 査		タ ガ				ス カ シ 孔	ペ ン ガ ラ	色	焼 成	胎 土	法 量 (m)	接合状況	備 考
						分 類	形 状	計測 (mm)	外								
		類 別	底 部	本/a/cm	外	内	調 査	a	b	c	d						
1	内	灰口	A2	6~7	1	~						8	硬	細		1次調査のみ	
2		灰口	A2	6~8	~	~						4	硬	細		1次調査のみ	
3		灰口	A3	7	~	~						8	硬	細		1次調査のみ	
4		灰口	A3	7	~	~						4	良	細		1次調査のみ	
5		灰口	○	4	~	1	M	10	16	4	3	○	4	良	細	1次調査のみ	

表48 墓輪観察表(4)

9. C群窯 9号窯②

遺物番号	器種	出土地点	部位	調 整				タ ガ				スカシ		ベンガラ	色	焼	胎	法量 (cm)	接合状況	備考				
				口	側	底	本/m	計測 (mm)				孔			外	内								
								a	b	c	d	外	内											
6	黄口	○	6	△	ナデ										3	良	細			1次調整のみ				
7	泡立石	○	7	△	—	1	白	8	18	6	6				3	良	微細			1次調整のみ				
8	円 灰口	○	8	△	↑	1	M	8	15	5	4	○			7	良	細			1次調整のみ 火照?				
9	泡立石	○	5	↑	—	1	白	18	26	8	5				3	良	細			1次調整のみ				
10	黄 灰出	○	5	△	—	1	白	9	20	7	6				2	軟	細			1次調整のみ				
11	埋出	○	4~5	←	△	2	M	12	21	7	7				3	軟	細							
12	黄口	○	7	↑	ナデ										4	良	細			1次調整のみ				
13	弱口 A1	—	—	ナデ	ナデ										7	硬	粗							
14	弱形	泡立石	○	7~10	—	ナデ									3	良	細							
15	円 黄	○	5~6	△	ナデ										8	硬	細			1次調整のみ 火照なし				
16	円 黄	○	8	△	ナデ	3	M	10	19	4	4				4	良	細			1次調整のみ 火照なし				

遺物番号	器種	出土地点	種類		ベンガラ	色	焼	胎	遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ	色	焼	胎													
			外	内																									
17	形 突口	透				3	良	細	18	形 包含輪	透				3	良	細												
18	象 包含輪	透				2	良	細	20	象 包含輪	器財				2	軟	細												

10. C群窯 10~16号窯① (図90~92、PLATE72・73a・75・76a)

遺物番号	器種	出土地点	部位 調 整				タ ガ				スカシ		ベンガラ	色	焼	胎	法量 (cm)	接合状況	備考	
			口	側	底	本/m	外	内	類	状	計測 (mm)									
											a	b	c	d	外	内				
1	D	3~7	△	ナデ										4	良	細			1次調整のみ 火照なし	
2	A2	5	△	ナデ										8	硬	粗			1次調整のみ	
3	A3	7	△	ナデ										2	良	細			1次調整のみ	
4	○	6	△	ナデ	1	M	7	22	4	5	○			3	良	細			1次調整のみ	
5	○	5	△	ナデ	三角	2	22	9	10					4	良	細			1次調整のみ	
6	○	7~10	△	ナデ	4	白	19	23	6	8				7	硬	細			1次調整のみ	
7	○	—	—	ナデ	1	M	11	21	10	9				4	良	細			1次調整のみ	
8	○	9	△	ナデ	1	M	13	21	6	4				4	良	細			1次調整のみ	
9	○	5	△	ナデ	3	M	11	20	6	6				3	良	細			1次調整のみ	
10	○	4~6	△	ナデ	1	白	8	22	10	8				3	良	細			1次調整のみ	
11	○	9	△	ナデ	1	白	10	18	6	7	○			8	硬	細			1次調整のみ	
12	○	9	△	ナデ	1	M	11	22	6	6				4	良	細			1次調整のみ	
13	○	5	△	ナデ	1	M	11	20	9	8				4	良	細			1次調整のみ	
14	○	3	↑	ナデ	1	M	9	23	8	8				2	軟	細			1次調整のみ	
15	○	4	↑	ナデ										4	軟	細			1次調整のみ 黒斑あり	

表48 増輪観察表(1)

10. C群窯 10~16号窯②

遺物番号	器種	出土地点	部位	調 整		タ ガ				スカラシ孔	色 外 内	焼 成 土	法量 (cm)	接合状況	備考		
				口	底	本/m	外	内	形 状	計測(mm)							
										a	b	c	d				
16	鉢	灰原上面	A1	○	6	↑	ナデ	1	白					4	良	細	1次調査のみ
17	円内	灰原上面		—	—	ナデ	ナデ	—	—					3	良	細	ヘラ記号あり
18	筒	灰原上面		5	↑	ナデ	1	白	8	15	4	4		4	良	粗	1次調査のみ ヘラ記号あり

遺物番号	器種	出土地点	種類		ペンガラ		色 外 内	焼 成 土	遺物番号	器種	出土地点	種類		ペンガラ		色 外 内	焼 成 土
			外	内	外	内						外	内	外	内		
19	形 象	灰原上 面	家	○	2	良	細	34	形 象	大刀	灰原上 面	3	良	細	3	良	細
20			家	—	3	良	細	35		人物		3	良	細	1	良	細
21			家	—	2	良	粗	36		人物		1	良	細	1	良	細
22			盾	—	3	良	微粗	37		動物		3	良	細	3	良	細
23			盾	—	3	良	細	38		動物		3	良	細	3	良	細
24			盾	—	3	良	細	39		その他		3	良	細	3	良	細
25			盾	—	3	良	細	40		その他		3	良	細	3	良	細
26			盾	—	3	良	細	41									
27			盾	—	4	良	細										
28			盾	—	3	良	細										
29			盾	—	3	良	細										
30			盾	—	3	良	細										
31			盾	—	3	良	細										
32			盾	—	3	良	細										
33			大刀	—	3	良	細										

11. C群窯 17号窯① (図93~95、PLATE73 b・76 b・77)

遺物番号	器種	出土地点	部位	調 整		タ ガ				スカラシ孔	色 外 内	焼 成 土	法量 (cm)	接合状況	備考			
				口	底	本/m	外	内	形 状	計測(mm)								
										a	b	c	d					
1	円 筒	灰原上 面	C	○	6	↑	ナデ	1	白	10	22	5	6		2	良	粗	口徑39.9
2			C	—	5	↑	—	—	—					3	良	粗		1次調査のみ
3			A3	—	6	↑	—	—	—					2	良	粗		1次調査のみ
4			A3	—	5	↑	ナデ	—	—					3	良	粗		1次調査のみ
5			C	—	4	↑	ナデ	—	—					4	良	細		1次調査のみ
6			A2	—	5	↑	ナデ	—	—					4	良	粗		1次調査のみ
7			D	—	7~9	↑	ナデ	—	—					4	良	細		1次調査のみ 口縫に安滑あり
8			C	—	4	↑	—	—	—					4	良	粗		1次調査のみ
9			C	—	—	ナデ	ナデ	—	—					3	良	粗		1次調査のみ
10			A3	—	5	↑	—	—	—					3	良	粗		1次調査のみ

表48 墓輪観察表16

11. C群窓 17号窓②

遺物番号	器種	出土地点	部位調整		タガ				スパンガラ 孔	色 調	焼 成	胎 土	法量 (cm)	総合状況	備考							
			分類	形状	計測(cm)																	
					a	b	c	d														
11	円筒	灰原上面	C	—	ナデ	ナデ				3	良	細			1次調査のみ							
12			C	8	↑	←				4	良	細			1次調査のみ							
13			C	7	↑	←				7	硬	細			1次調査のみ							
14			C	7	↖	ナデ				7	硬	細			1次調査のみ							
15			C	—	—	—				3	良	粗			1次調査のみ							
16			○	13	↖	ナデ	1	M	9	24	12	10	○	3	硬	細						
17			○	13	↑	ナデ	4	台	14	22	12	12		4	硬	細						
18			○	5	↖	ナデ	2	台	10	15	9	4		4	硬	粗						
19			○	5	↑	↑	1	台	10	25	10	10		4	硬	細						
20			○	3-4	↖	ナデ	1	M	9	18	5	6		8	硬	細						
21			○	4	↖	ナデ	3	M	9	21	9	10		3	硬	細						
22			○	6	↖	ナデ	2	台	15	26	8	6		3	硬	粗						
23			○	3	↖	↖	1	M	10	22	8	7	○	3	硬	細						
24			○	8	↖	ナデ	1	M	9	23	9	9		4	硬	細						
25			○	9	↖	ナデ	1	M	13	24	12	13		2	硬	細						
26			○	5	↖	ナデ	4	M	10	14	8	8		5	硬	細						
27			○○	5-7	↑	ナデ	1	M	14	25	9	6	○	7	硬	粗 底径28.6						
28			○○	5-7	↑	ナデ	1	M	11	27	8	8		7	硬	粗 底径34.7						
29			○○	11	↖	ナデ	2	台	7	17	6	6		7	硬	細						
30			○	—	ナデ	—								3	硬							
31			○	5	↑	ナデ	1	M	10	19	6	5		2	良	細						
32			○○	5	↑	ナデ	1	M	10	20	5	4		4	良	細						
33			○	—	↑	←								4	良	細						

遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色 調	焼 成	胎 土	遺物番号	器種	ベンガラ		色 調	焼 成	胎 土	
				外	内						外	内				
			調	成	土											
34	形象	灰原上面	家			3	良	粗	44	象	腐			2	良	細
35			家			2	良	粗	45		腐			4	良	細
36			居			3	良	粗	46		居			2	良	粗
37			居			3	良	粗	47		居			3	良	細
38			居			2	良	粗	48		居			3	良	細
39			居			3	良	粗	49		居			2	良	粗
40			居			3	良	細	50		居			2	良	細
41			居			3	良	粗	51		居			3	良	細
42			居			3	良	粗								
43			居			3	良	細								

表48 地輪観察表(17)

12. C群落 18号席 (図96・97、PLATE73b・78)

遺物番号	出土地点	部位	調査	タガ				スカシ孔	ベンガラ外	色	焼成土	法量(cm)	接合状況	備考					
				分類	形態	計測(mm)													
						a	b	c	d										
1	円底	B1 ○	6 ↑ ←	1 台	8 18 4 5	○	2 良 細	口径44.0		1次調整のみ									
2	C	5 ↑ ←					8 良 細	口径30.0		1次調整のみ									
3	A3	6~7 ↑ ナデ	1 M 12 22 5 7	○	3 良 細	口径37.5			1次調整のみ										
4	A3 ○ ○	9 ↑ ナデ	1 M 12 25 4 5	○	3 良 細	口径38.0	小径 1次調整のみ 大径 ハラダ式												

13. 1号工房 (図104・105、PLATE79・80・84a)

遺物番号	出土地点	部位	調査	タガ				スカシ孔	ベンガラ外	色	焼成土	法量(cm)	接合状況	備考					
				分類	形態	計測(mm)													
						a	b	c	d										
1	SK2 A3 ○	5 ↑ ←	1 M 14 23 10 9							4 良 細	口径34.1	5点接合							
2	SK3 ○	6 Bb-2 ↗	1 M 11 22 9 9	○						3 軟 細	底径30.4	4点接合							
3	井筒 ○	5~6 Bb-2 ナデ	2 M 16 23 7 6	○						4 良 細	底径30.0	6点接合							
4	SKB ○ ○	7 Be ナデ	1 M 12 24 8 7	○						4 良 細	底径31.1	3点接合	複数のスキレット、1ヶ所のみ 入る感じ						
5	井筒 ○	6 Bb-2 ←	1 M 14 23 9 8	○						3 良 細	底径30.0	7点接合	右巻きづくり						
6	SKM A1 ○	7 ← ナデ								4 良 細									
7	SK3 ○	10 ← ↗	2 M 12 21 9 8							2 良 細									
8	P 4 ○	5 ← ナデ	1 M 14 22 8 8	○						1 軟 細									
9	SKM ○	9 ← ←	— — —					○		6 軟 細									
10	SKM ○	5 ← ナデ	1 M 10 21 7 6	○						4 良 細									
11	SK3 ○	9 ← ナデ						○		7 良 細									
12	井筒 ○	5 ← ナデ	1 台 14 20 6 4							4 良 細									
13	P 5 ○	6 ← ナデ	1 台 15 26 6 6							4 良 細									
14	井土 ○	9 Bb-1 ナデ	2 M —— 10 —							7 良 細									
15	SKB ○	8 ← ナデ								2 良 細									
16	P 5 ○	7 ← ナデ								3 軟 細									
17	埋土 ○	— — —	2 台 12 19 11 10							2 良 細			ナガのみ						
18	P 4 ○	5 ← ナデ						○		2 良 細			2ヶ所に札らしきものあり						
19	主柱 ○ ○	10 Bb-2 ナデ	3 M 13 20 10 11	○						7 良 細	底径13.9	10点接合	小型						
20	井筒 ○	7 ↑ ←						○		4 良 細									
21	井筒 ○	— — —								3 軟 細									

14. 2号工房① (図112~115、PLATE80・85・86)

遺物番号	出土地点	部位	調査	タガ				スカシ孔	ベンガラ外	色	焼成土	法量(cm)	接合状況	備考					
				分類	形態	計測(mm)													
						a	b	c	d										
1	注跡 A2	6 Ba ←						○ ○	2 良 細	口径36.2	4点接合								
2	円筒 SK9 ○	6 Bb-1 ↗	1 M 19 30 13 12					○ ○	3 良 細	底径36.4	9点接合	ヘラ記号あり 入る?							
3	主柱 ○	— Be ナデ	1 M 14 27 9 10							3 良 細	底径36.7	6点接合	↑と同一個体						
4	SK9 ○	— — —	1 台 14 26 14 15	○				1 軟 細	底径32.4	6点接合									
5	埋土 ○ ○	8 Be ↗	1 M 11 24 11 6	○				3 良 細	底径30.6	9点接合	2番づくり								

表48 墓輪観察表18

14. 2号工房②

遺物番号	器種	出土場所	部位	調査				タガ				スカラシ孔	ベンガラ外	色調	焼成土	胎法	量(cm)	接合状況	備考
				分類	形状	計測(mm)				スカラシ孔	ベンガラ外	色調	焼成土	胎法	量(cm)	接合状況	備考		
						a	b	c	d										
6	SK6	○	○	6 ← ↗	1 M	15	24	11	9	○		4	良	細	英29.8	4直接合	左巻きづくり		
7	SK9	○ ○	-	Bc ナダ ⁹	1 M	15	25	8	7	○		3	良	細	底径36.6	5点接合			
8	柱9	○ ○	-	横ナゲナゲ	4 台	14	25	13	14	△		2	良	細	底径39.2				
9	埋土 A3	-	-	横ナゲ横ナゲ								7	硬	細					
10	埋土 A4	6 ←	ナダ									3	良	細					
11	陶器	○	6 ←	ナダ ⁹								3	良	細					
12	埋土	○	6 ←	ナダ ⁹	3 M	9	17	7	7			3	良	細					
13	柱2	○	-	ナダ ⁹	1 M	10	20	9	10	○		4	良	細			14-17-21と同一個体		
14	柱2	○	-	ナダ ⁹	1 M	12	16	9	8	○ ○		4	良	細					
15	柱1	○	-	ナダ ⁹	1 M	9	18	9	11			7	硬	細					
16	SK6	○	-	-	1 台	12	21	11	8			3	軟	細					
17	骨	SK6	○	-	ナダ ⁹	1 M	11	16	7	6	○ ○		4	良	細				
18	床面	○	7 ←	ナダ ⁹	1 M	14	25	13	9			2	良	細					
19	床面	○	-	-	2 M	18	25	9	8	○		1	軟	細					
20	埋土	○	5 ←	ナダ ⁹	1 M	14	24	10	8			5	硬	細					
21	陶器	○	-	ナダ ⁹	1 台	12	21	10	9	○ ○		4	良	細					
22	柱9	○	9 Bb-1	ナダ ⁹	2 M	13	20	9	8			7	硬	細					
23	埋土	○	10 ←	ナダ ⁹	1 M	18	26	8	6			7	硬	細					
24	陶器	○	6 ← ↗									3	良	細					
25	埋土	○	-	ナダ ⁹ ナダ ⁹	-							2	良	細			左巻きづくり		
26	埋土	○	11 ←	ナダ ⁹								2	良	細					
27	埋土 A2	10 ↑ ←								○ ○	3	良	細		2点接合	26と同一個体			
28	陶器	○	10 ↑ ←							○ ○	3	良	細						
28	陶器	○	-	↑ ←						○ ○	3	良	細						
30	柱4 A1	9 ↑ ↗										3	良	細			審査		
31	柱柱外	○	4-6 Bb-2 ↗	3 M	12	18	7	6	○		5	良	細		2点接合	ヘラ足あり 3段肩口付一輪			

遺物番号	器種	出土場所	部位	ベンガラ				色調	焼成土	胎法	量(cm)	接合状況	備考						
				外	内	種類													
						出	土												
32	埋土	盾?				2	良	細	42										
33	柱5	蓋(羽根飾り部)				2	軟	細	43										
34	埋土	蓋(羽根飾り部)				2	軟	細	44										
35	形	埋土 蓋(羽根飾り部)				2	軟	細	45	形									
36	埋土	蓋(羽根飾り部)				2	軟	細	46										
37	柱2	蓋(輪部)				2	良	細	47										
38	象	樹皮 蓋(輪部)				2	良	細	48	象									
39	柱2	蓋(輪部)				2	良	細	49										
40	粗土	蓋(輪部)				2	良	細	50										
41	埋土	蓋(輪部)				2	良	細	51										
										柱9 蓋(基台部)									
											2	良	細						

表48 墓輪観察表(15)

14. 2号工房③

遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色調	焼成	胎土	遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色調	焼成	胎土	
				外	内								外	内				
52	形	主柱9	蓋(蓋台部)			2	良	細	55	形	埴土	不明				3	良	細
53	形	柱土	蓋(蓋台部)			2	良	細	56	象	埴土	不明				3	良	細
54	象	SK6	不明			3	良	細										

15. 3号工房① (図122-124・128、PLATE82・87・89b)

遺物番号	器種	出土部位	調整	タガ				スカラシ孔	ベンガラ	色調	焼成	胎土	法身(m)	接合状況	備考
				分	形	計測(mm)	外								
1	SK3-A2	口	5 Bb-1	1	M	15 23 10 7				5	良	細	口徑35.5	5点接合	2号工房31と同一鉢体
2	北端A3	○	4~5 Bb-1	1	M	10 21 10 9	○			8	硬	細	口徑38.0	24点接合	ヘラ記号あり
3	SK3-A3	○	5 Ba	4	M	8 20 11 11	○			3	良	細	口徑35.8	200点接合	ヘラ記号あり
4	南端A3		5 Bb-1	ナデ	1	M	14 24 11 10			3	軟	細	口徑35.0		
5	SK3	○ ○	5 Bb-1	ナデ	1	M	10 24 11 10	○		4	良	細	底径28.8	38点接合	右巻きづくり
6	南端	○ ○	4~5 Be	ナデ	1	M	14 24 11 10	○		2	良	細	底径31.4	15点接合	
7	南端A1		5	~	~					4	良	細			
8	P1 A3		10	~	~					5	良	細			
9	SK3-A3		8 Bb-1	~						8	硬	細			
10	北端A2		~	~	ナデ					3	良	細			
11	埴土	○	5	+	ナデ	1	台	10 24 12 10	○	2	良	細			
12	北端7	○	5~6	~	ナデ	1	M	12 22 9 8	○	3	良	細			
13	埴土	○	8	~	ナデ	1	M	12 21 10 8		4	良	細			
14	SK3	○	~	~	ナデ	1	M	17 23 5 7		3	軟	細			ナガのみ
15	埴土	○	~	~	~	3	M	7 15 8 7		5	硬	細			ナガのみ
16	南端	○	5	~	ナデ	1	M	12 22 9 10		5	良	細			
17	SK3	○	4~5	~	~					6	硬	細			
18	SK3	○	6~7	~	ナデ	1	台	9 19 6 6		1	良	細			
19	南端	○	5	~	ナデ	1	台	9 19 6 6		2	軟	細			黒化が著しい
20	SK3	○	~	~	~	1	M	10 ~ ~ 8		3	軟	粗			黒化が著しい
21	北端	○	~	~	~	1	M	13 21 8 5		1	軟	細			黒化が著しい
22	南端	○	4	~	ナデ					3	良	細			左巻きづくり
23	北端7	○	~	~	~					3	硬	細			
24	埴土	○	~	~	~					3	良	細			
25	埴土	○	4	↑	~	1	M	15 23 7 6		3	良	細			左巻きづくり、表面の黒化が著しい。
26	南端	○	8	~	~					7	良	微細			
27	北端	○ ○	6	~	ナデ	1	台	11 21 7 6		2	軟	粗	底径13.8	35点接合	小型
28	南端	○	8	~	~	1				4	良	細			

表48 墓輪観察表20

15. 3号工房②

遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色	焼	胎	遺物番号	器種	出土地点	ベンガラ		色	焼	胎	
				外	内							外	内				
28	形	北側溝	蓋(受け部)			2	良	細	51	形	排水溝	蓋(受け部)			2	良	細
29	象	北側溝	蓋(受け部)			2	良	細									

16. 工人集落 1号溝 (図175、PLATE104a)

遺物番号	器種	出土地点	部位	調整				タガ				スカラシ孔	ベンガラ	色	焼	胎	法量(cm)	接合状況	備考						
				分形		計測(cm)		外		内															
				外	内	a	b	c	d																
90				○	5~6	Bb-2	△	1	M	10	19	11	10	○		4	硬	細	腹厚34.0	91・92と同一個体					
91				○	5~6	Bb-2	△	1	M	11	21	10	10	○		4	硬	細							
92				○	4~5	—	ナデ									3	軟	細		91と同一個体					
93				○ ○	6	Bb-2	△	2	M	10	23	11	10			4	硬	細		右巻きづくり					
94	筒			○	5	—	ナデ									3	軟	細							
95				○	—	—	ナデ	1	—	—	—	7	—			3	軟	細		小型 凹底あり					
96				○	—	—	ナデ	1	台	9	18	6	4			3	軟	細		小型					

17. 工人集落 包含層 (図197・198、PLATE104)

遺物番号	器種	出土地点	部位	調整				タガ				スカラシ孔	ベンガラ	色	焼	胎	法量(cm)	接合状況	備考						
				分形		計測(cm)		外		内															
				外	内	a	b	c	d																
18				○	7	Bb-1	△	1	M	12	22	9	10			2	良	細							
19				○	6	—	—	1	M	8	15	8	8			4	良	細							
20				○	7	—	—	2	M	11	21	8	7			2	良	細							
21				○	5	—	△									2	良	細							
22	筒			○	6	—	△	1	M	11	20	8	6			2	良	細							
23				○ ○	7	Bb-1	△	2	M	11	20	8	8			2	良	細							
24				○ ○	6~8	Bb-1	△	1	M	10	21	8	8	○		2	良	細		右巻きづくり					
25				○	3~5	—	△	2	台	8	18	11	11			4	良	細		小型					
26	器			○	9	—	ナデ									4	軟	細							
27	円			○	7~9	Ba	ナデ	1	M	10	22	7	6			2	軟	細		ヘラ記号あり 2号工房と同様					
28	筒			○	6	—	△									2	良	細		ヘラ記号あり					

遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色	焼	胎	遺物番号	器種	出土地点	ベンガラ		色	焼	胎
				外	内							外	内			
29	形	包含層	草摺			1	軟	細	30	形	包含層	蓋?		2	良	細

表48 墓輪観察表(2)

18. 太田茶臼山古墳(図318、PLATE135)

遺物番号	出土地点	部 位	調 整		テ ガ				スカシ孔	ベンガラ外	色	焼	施	法量(m)	接合状況	備考								
			分類	状態	計測(mm)																			
					a	b	c	d																
1	外塁A1	口	底	本/m	内	外									3	良 細								
2	外塁A2				10	~	ナデ								3	良 細								
3	外塁A3				6	~	ナデ								6	硬 疊面								
4	外塁	○	12	~	ナデ	1	M	11	17	7	7				3	良 細								
5	北跡	○	4	~	ナデ										3	良 細								
6	外塁	○	9	~	ナデ										2	良 細								
7	東側塁	○	5	~	ナデ	2	M	9	12	6	5	○			3	良 細	小粒							
8	外塁	○	12	~	ナデ										2	良 細								
9	外塁	○	5	~	ナデ	3	M	10	19	10	9				2	良 細								
10	外塁	○	~	~	ナデ	1	M	11	20	8	9	○			2	良 細								
11	外塁	○	11	~	ナデ	1	M	12	22	9	6				3	良 細								
12	外塁	○ ○	3~4	Bb-1	~	1	M	14	20	8	7	○			2	良 細	底径32.0							
13	外塁	○	10	~	ナデ	1	M	10	22	9	8				2	良 細								
14	朝顔	○										○	○		2	良 細								
15	朝顔	○										○	○		3	良 細								
16	外塁	○													3	良 細								

遺物番号	器種	出土地点	種類	ベンガラ		色	焼	施	
				外	内				
17	形象	北跡塁	家(墨本)			7	良	施	

表48 墳輪観察表22

PLATES



a. 新池埴輪製作遺跡の位置（昭和24年：空中写真）



b. 新池埴輪製作遺跡とその周辺（昭和35年：空中写真）

PLATE 2



新池遺跡の空中写真（調査前）



遺構全景（空中写真）

PLATE 4

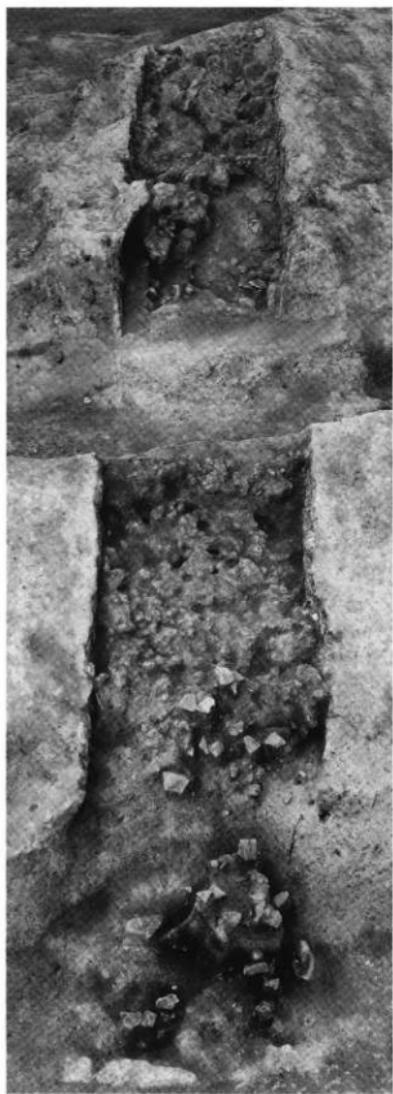


埴輪窯群・埴輪工房群



A群室 全景（南西から）右から1号室・2号室・3号室

PLATE 6



a. 1b号窑 崩落状态



b. 1b号窑 遗物出土状态



a. 1a号窑 遗物出土状态



b. 1a号窑 完掘状态

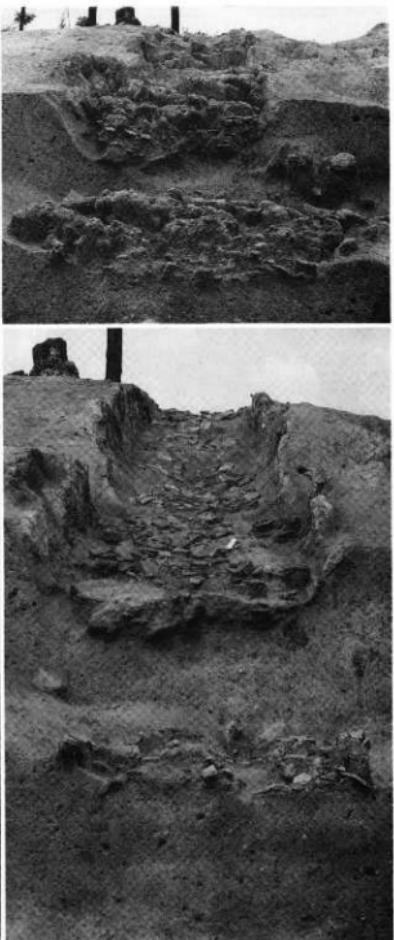
PLATE 8



a. 2号窑 崩落状態

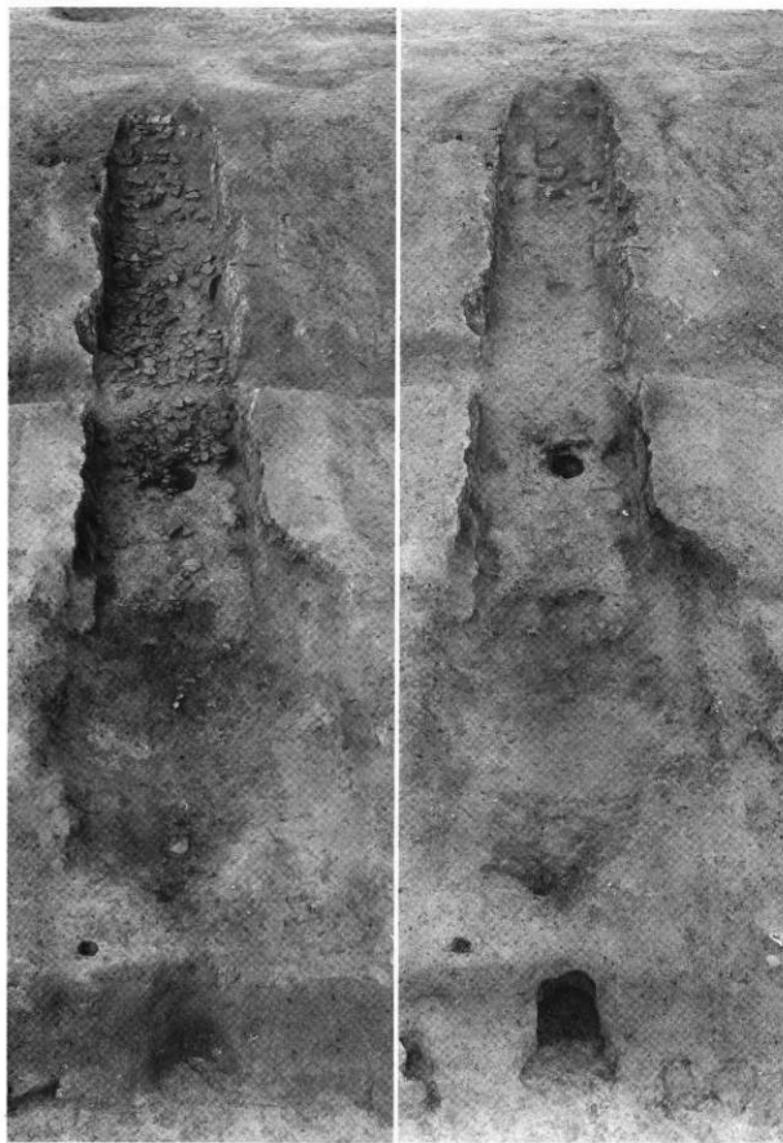


b. 2号窑 遺物出土状態



d. 2号窯 地滑り跡(東から)

PLATE 10

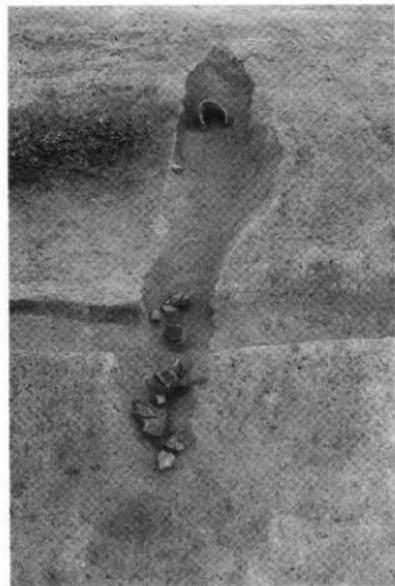


a. 3号窑 遗物出土状态

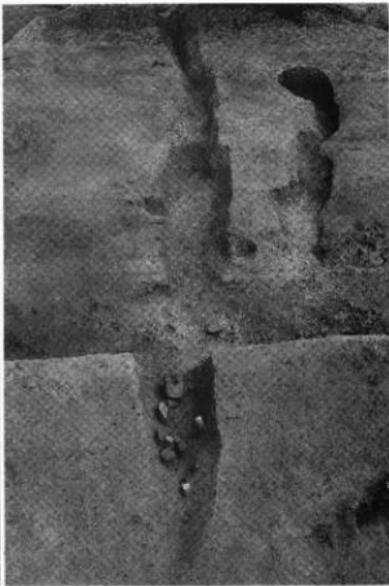
b. 3号窑 完掘状态



a. 1号・2号窯 地滑り跡（西から）



b. 排水溝（西溝）



c. 排水溝（東溝）

PLATE 12



a. B群窯（南から）



b. C群窯（北から）



c. 5号窯（断面）



d. 9号窯（突出部断面）



a. 18号窯 灰原（北から）



b. 18号窯 灰原（東から）

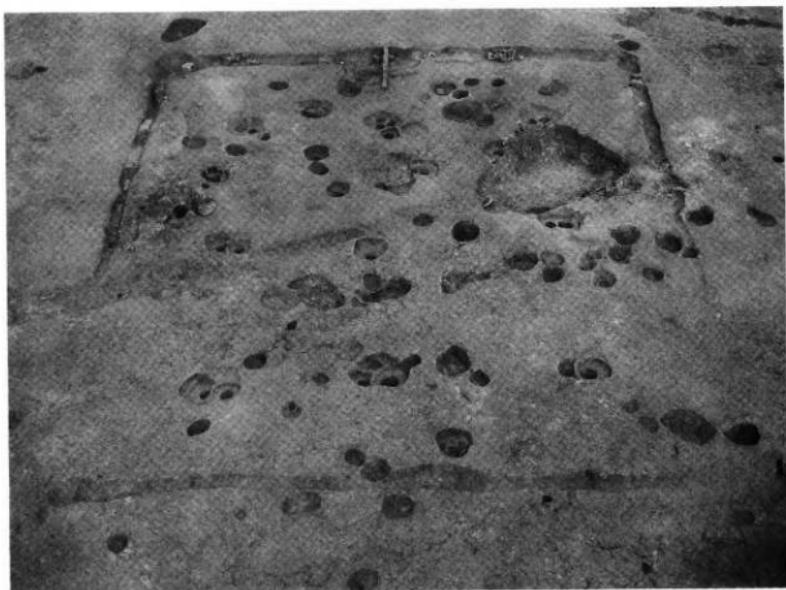
PLATE 14



a. 工房群 全景（東南から）



b. 工房群 全景（北東から）



a. 1号工房 全景（南から）



b. 1号工房 全景（北から）

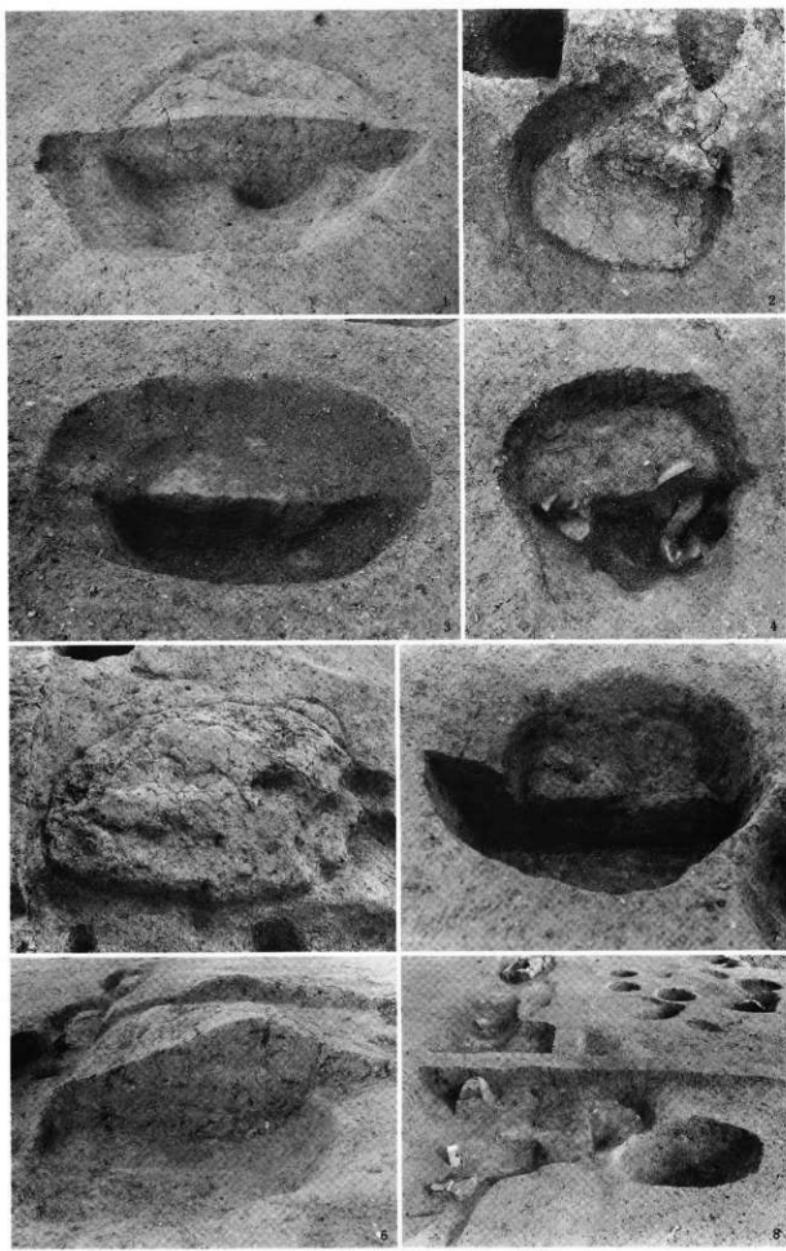
PLATE 16



a. 1号工房 北半部 遺物出土状態（東から）

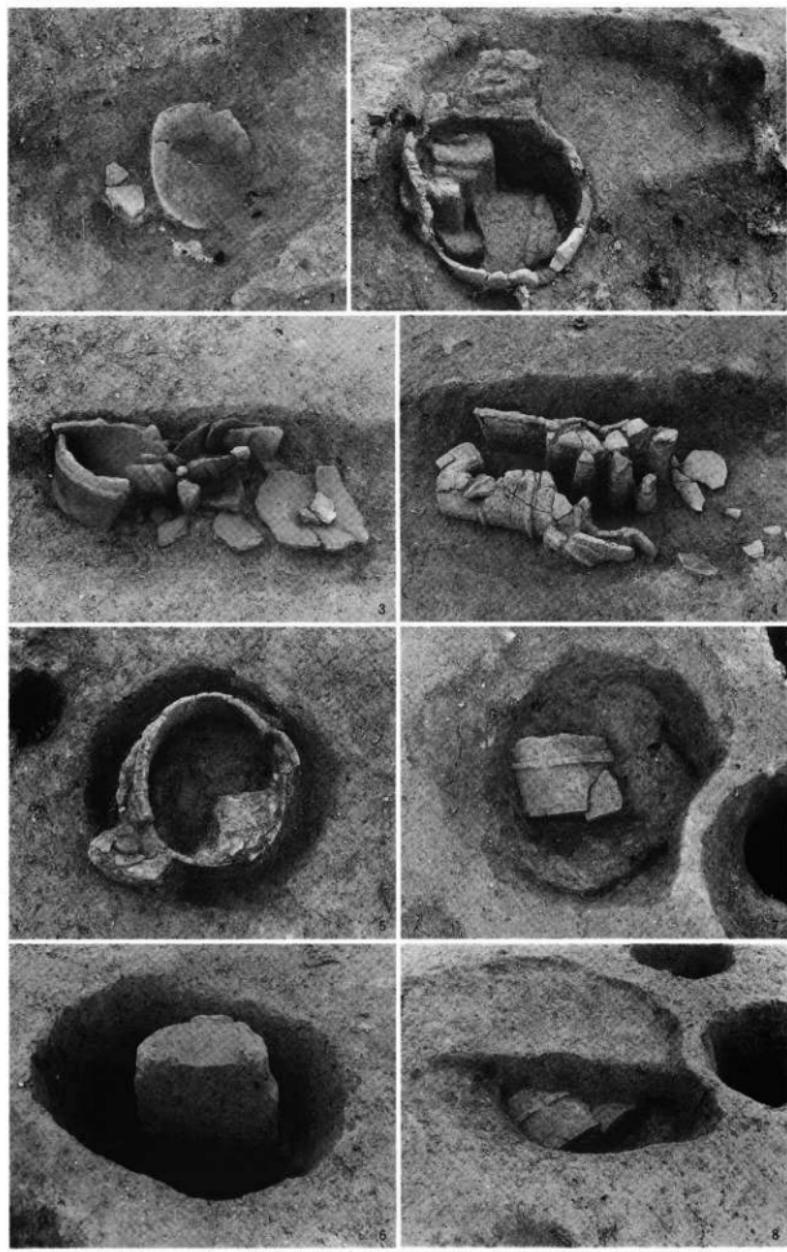


b. 1号工房 北西部 遺物出土状態（南から）



1号工房の土坑 1.SK1 2.SK4 3.SK6 4.SK10 5・6.SK18 7.SK8 8.SK19

PLATE 18



1号工房の土坑・周溝 1.北周溝 土師器24 2.SK17 3.北周溝 墓輪4 4.北周溝 墓輪5 5-6.SK3 7-8.SK8

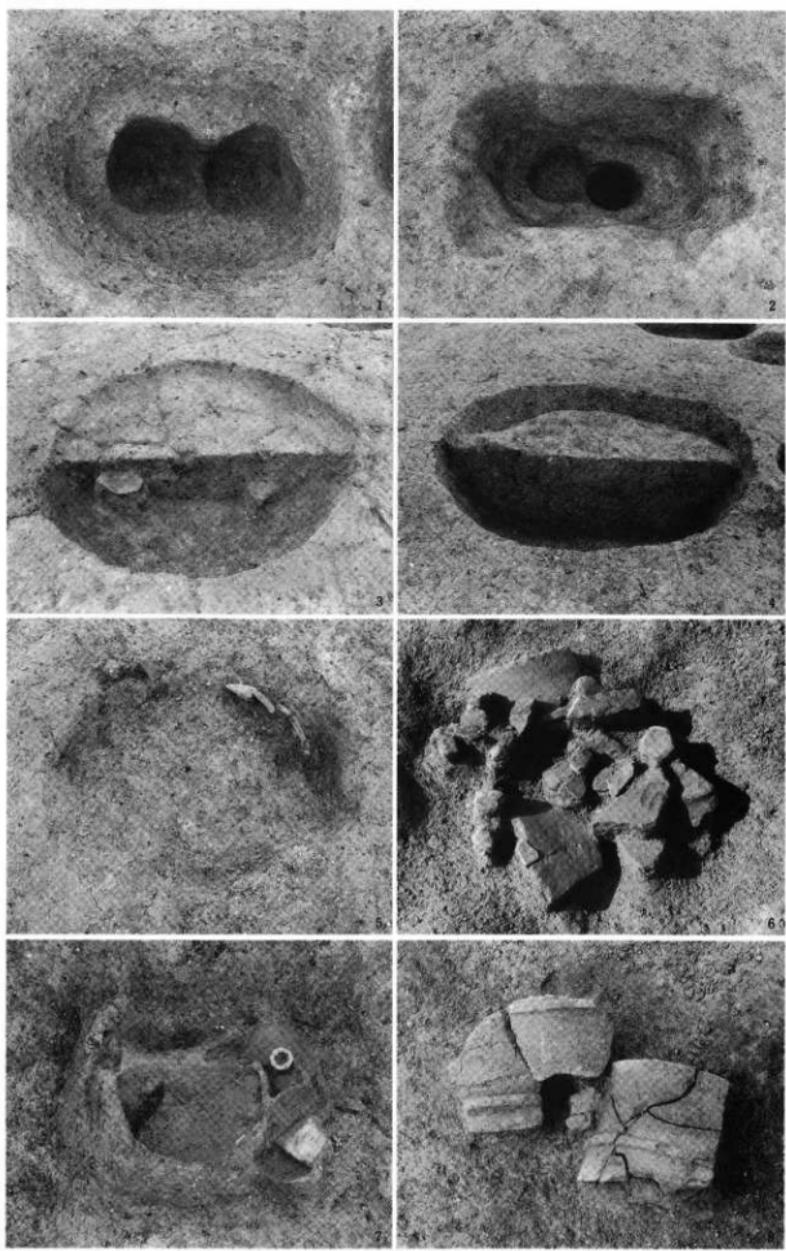


a. 2号工房 全景（南から）



b. 2号工房 全景（北から）

PLATE 20



2号工房の柱穴・土坑 1.主柱4 2.主柱1 3.SK2 4.SK5 5.SK1 6.主柱9 7.北周溝 土器群 8.SK9